



信玄全集

十七
十六

末
首

ケ 5
68
38





信玄全集末書上巻之十七

共下

- 一 押右殿仍る作法十三ヶ条の事
- 二 螺の事
- 三 整金の事
- 四 頬膏の事
- 五 胴丸の事
- 六 朋下地の事
- 七 火盛小柄卯の花系火盛うら火盛系威の事
身錦乃並玄と一在れ事
- 八 草摺の事

九 大神中袖小袖のしるし

十 籠手のしるし

十一 脇引のしるし

十二 佩指のしるし

十三 臙膏のしるし

十四 脚絆のしるし

十五 足袋のしるし

十六 下駄のしるし

十七 小袴のしるし

十八 衣裏巻のしるし

十九 鞆オモツロのしるし

廿 弓籠手のしるし

廿一 胡オチクイ録レキのしるし

廿二 胡オチクイ履レキのしるし

廿三 具足オチクイのしるし

金部抄末書卷十七
九 大神中袖小袖のしるし
十 籠手のしるし
十一 脇引のしるし
十二 佩指のしるし
十三 臙膏のしるし
十四 脚絆のしるし
十五 足袋のしるし
十六 下駄のしるし
十七 小袴のしるし
十八 衣裏巻のしるし
十九 鞆オモツロのしるし
廿 弓籠手のしるし
廿一 胡オチクイ録レキのしるし
廿二 胡オチクイ履レキのしるし
廿三 具足オチクイのしるし

信玄全集末書上巻之八

- 一 軍配丈九寸糸の事
- 二 武田丈八寸 母 旗幟指曹の事 武田二丈の

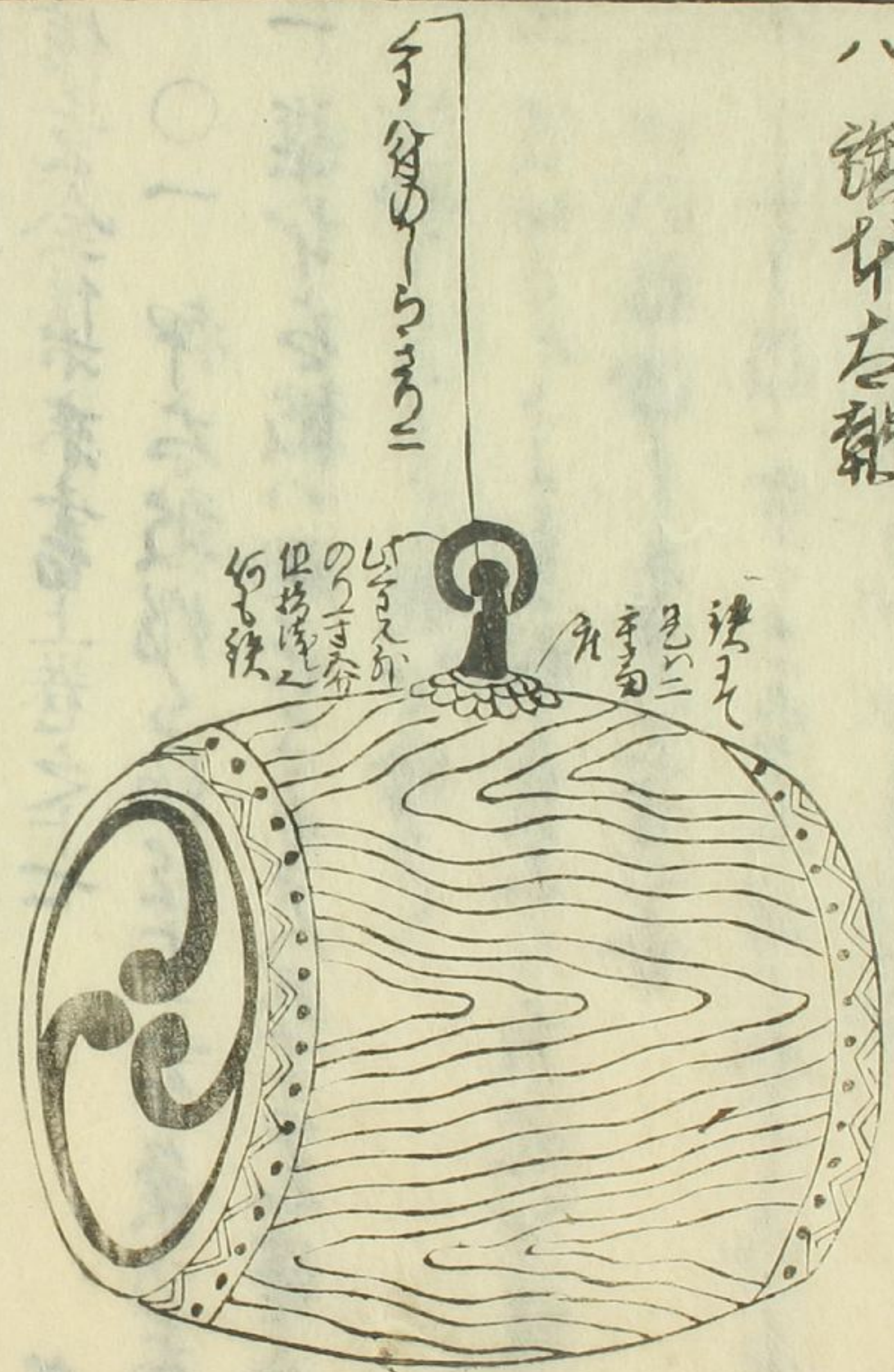
信玄全集末書上巻之十七

共巻下

- 一 押右被褥の作法十二寸糸の事
- 一 旗幟右被の胴長さ二尺二寸五分
びわうふりて龍と繪りく
- 二 皮切りして一丈或は二丈を縫く
- 三 口の幅一尺二寸七分
- 四 びわう敷一方一丈二寸五分合て六寸五分のびわう
高き又分こぐらうして七分
- 五 胴の長さの長あり中ふらうらふらうして五分を指
幅一尺二寸五分
- 六 胴の皮のわらうを裁寸を分是よりびわうを縫く

七寸五分以下二寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下二寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓
七寸五分以下の菊座大鼓

八寸五分以下

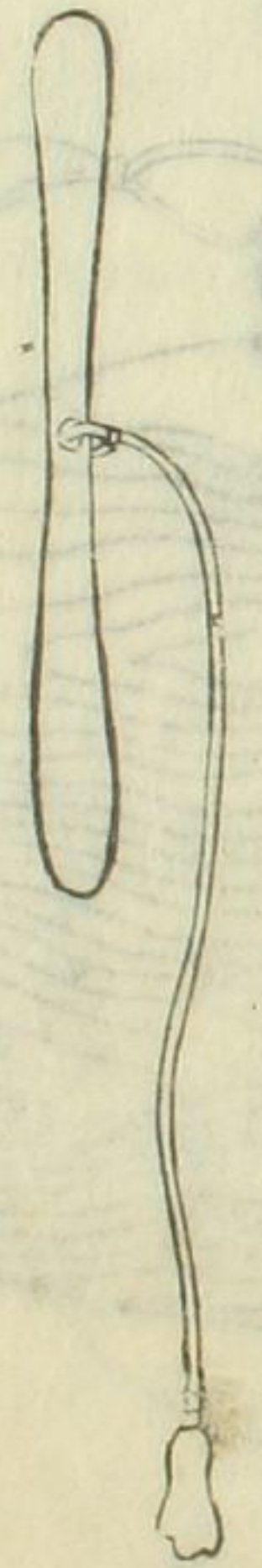


長持太鼓

九寸五分以下二寸五分以下の二尺を寸五分木地びやう
ゆかり鉄のびやうの巻くく右也を巻く

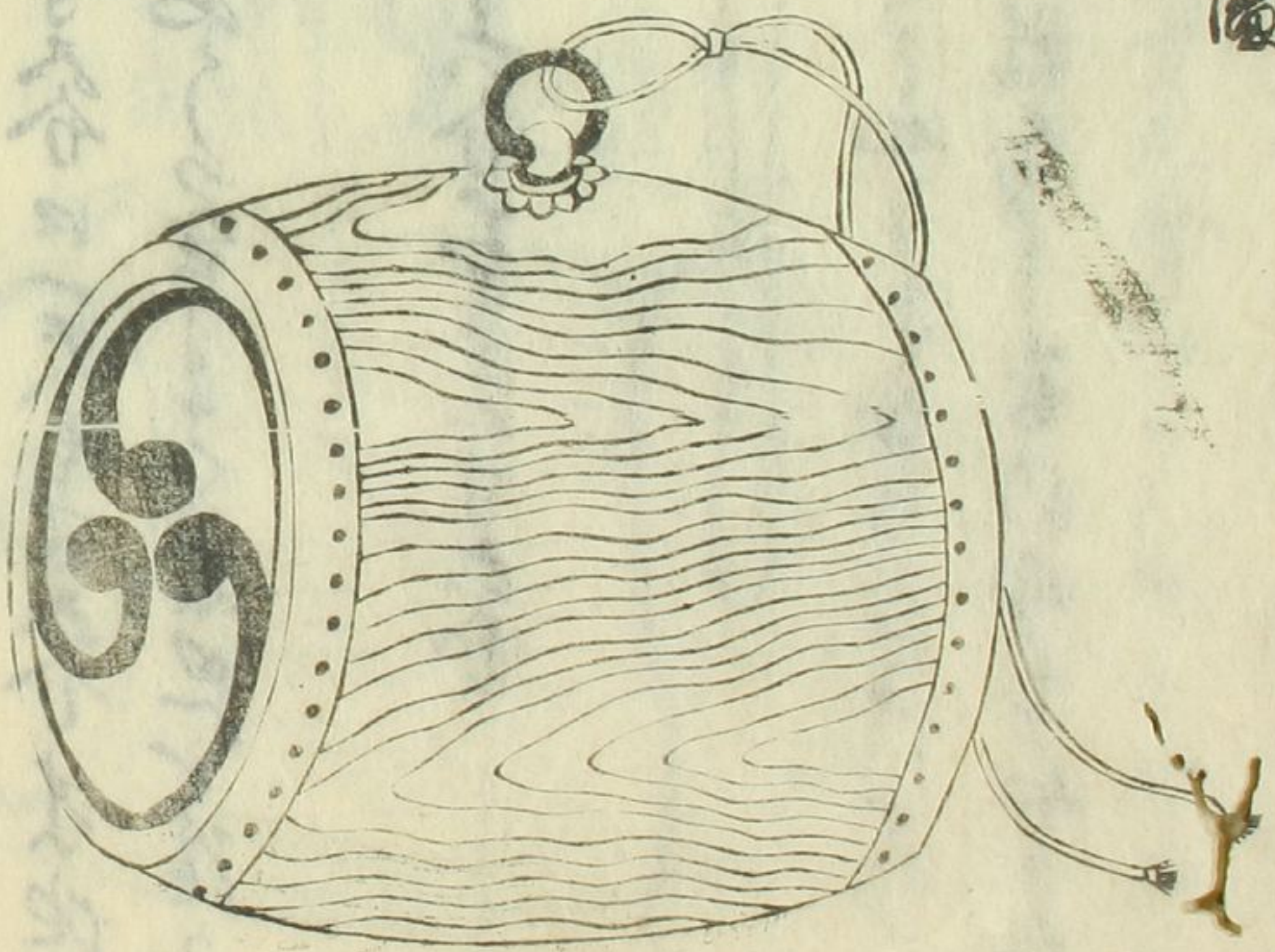
抱乃寸法

十寸五分以下三寸五分以下三寸五分



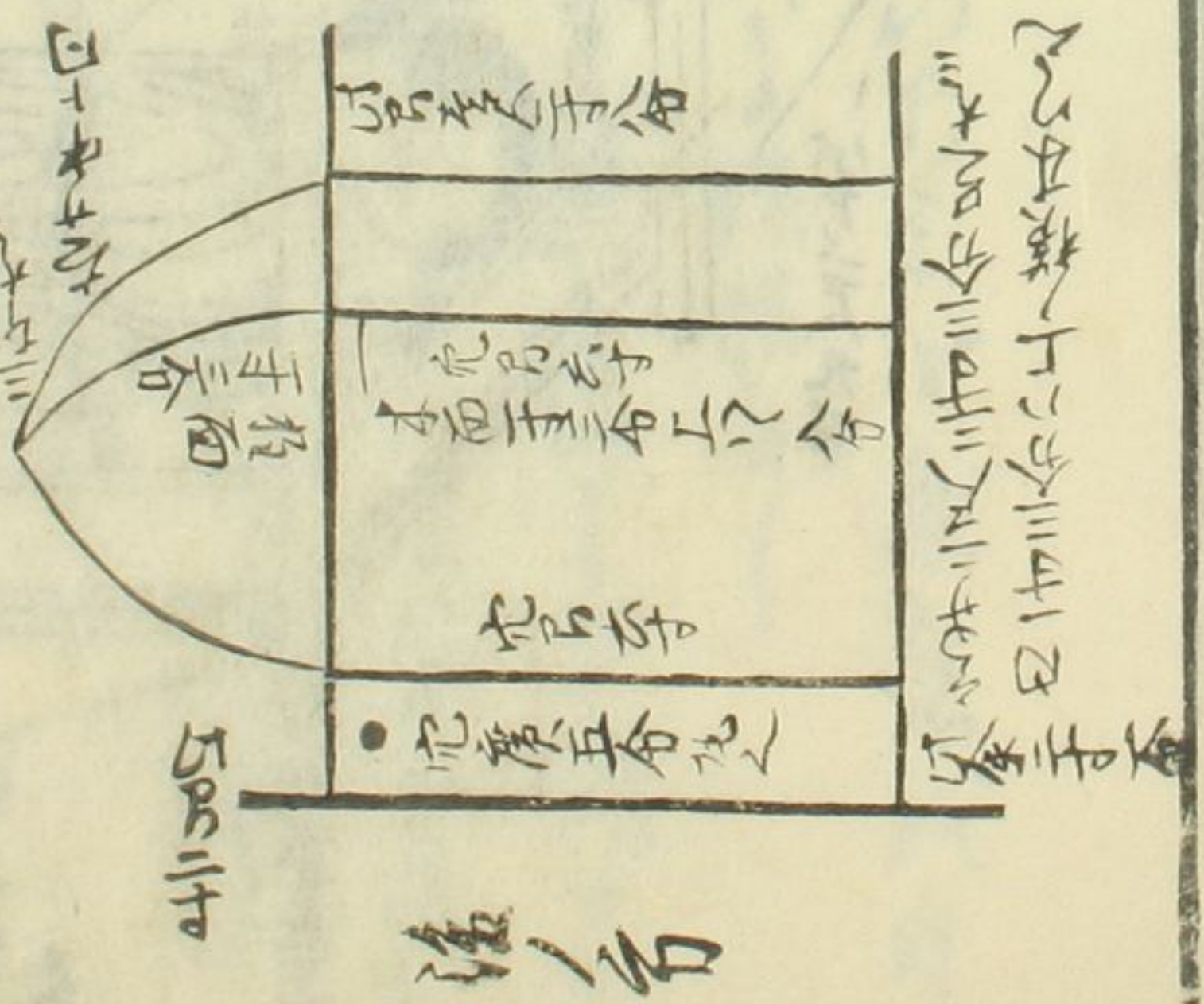
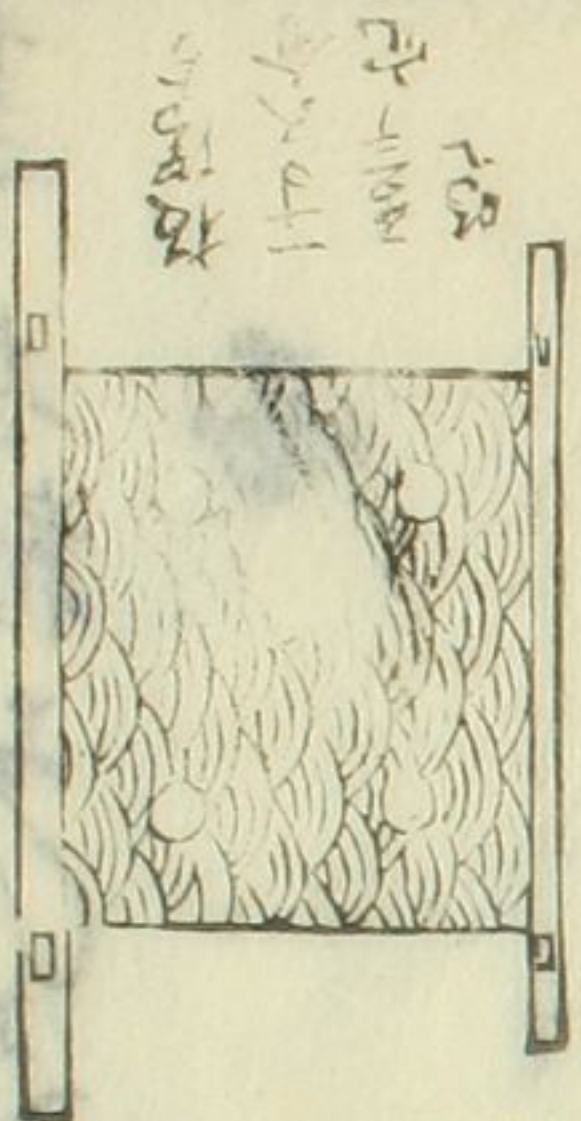
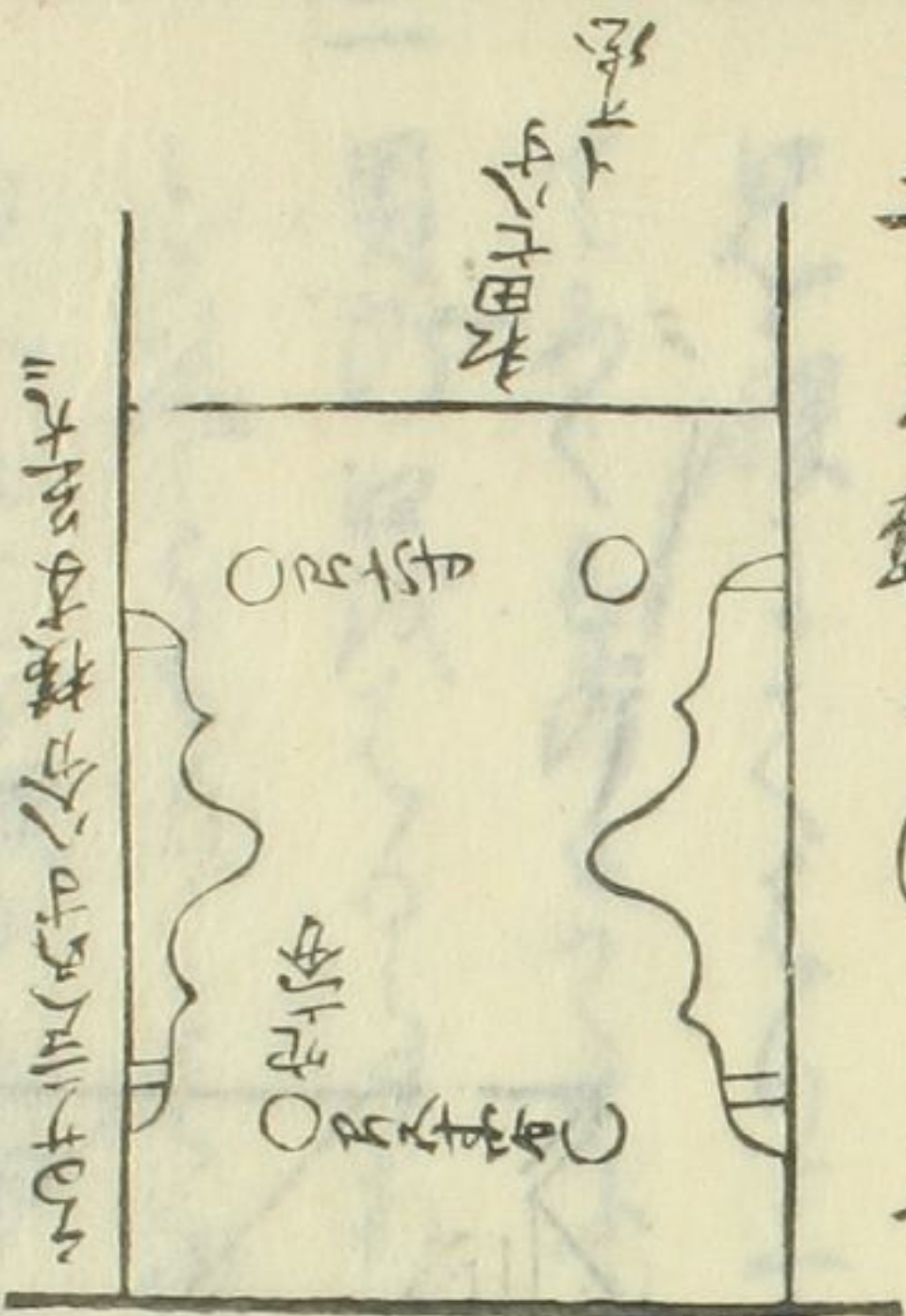
右の信玄作くくやうをありを代えくくはら
胴短負いと紙祿ありものゆかりありがは

十一 足控太鼓圖



Handwritten notes in cursive Japanese characters, likely describing the construction or use of the drum. The text is partially obscured by the drawing.

十二 右鼓の作り

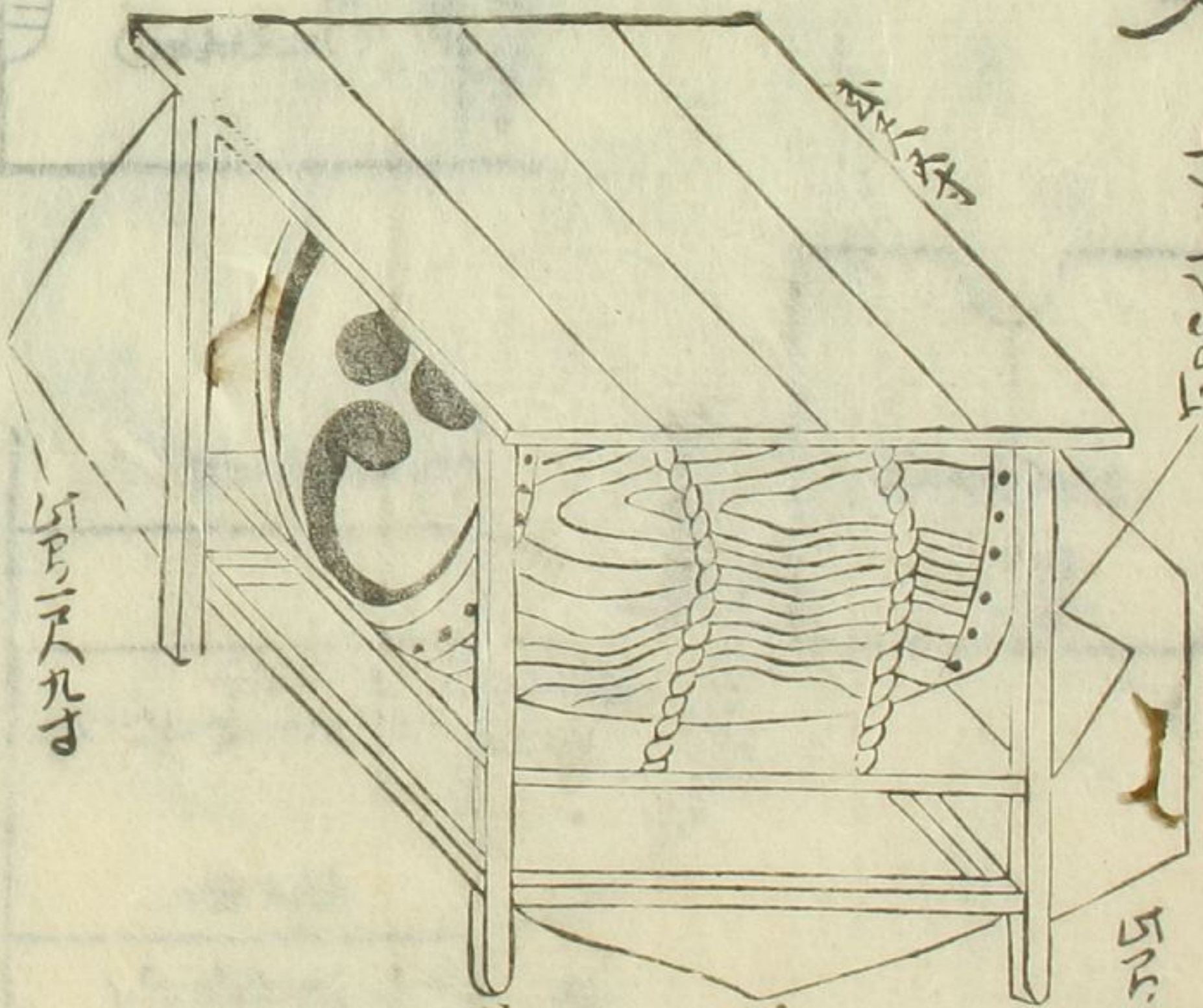


Handwritten notes in cursive Japanese characters, likely describing the construction or use of the drum. The text is partially obscured by the drawing.

十二 左被のいへ

十寸五分

馬



四寸五分

四寸五分
寸

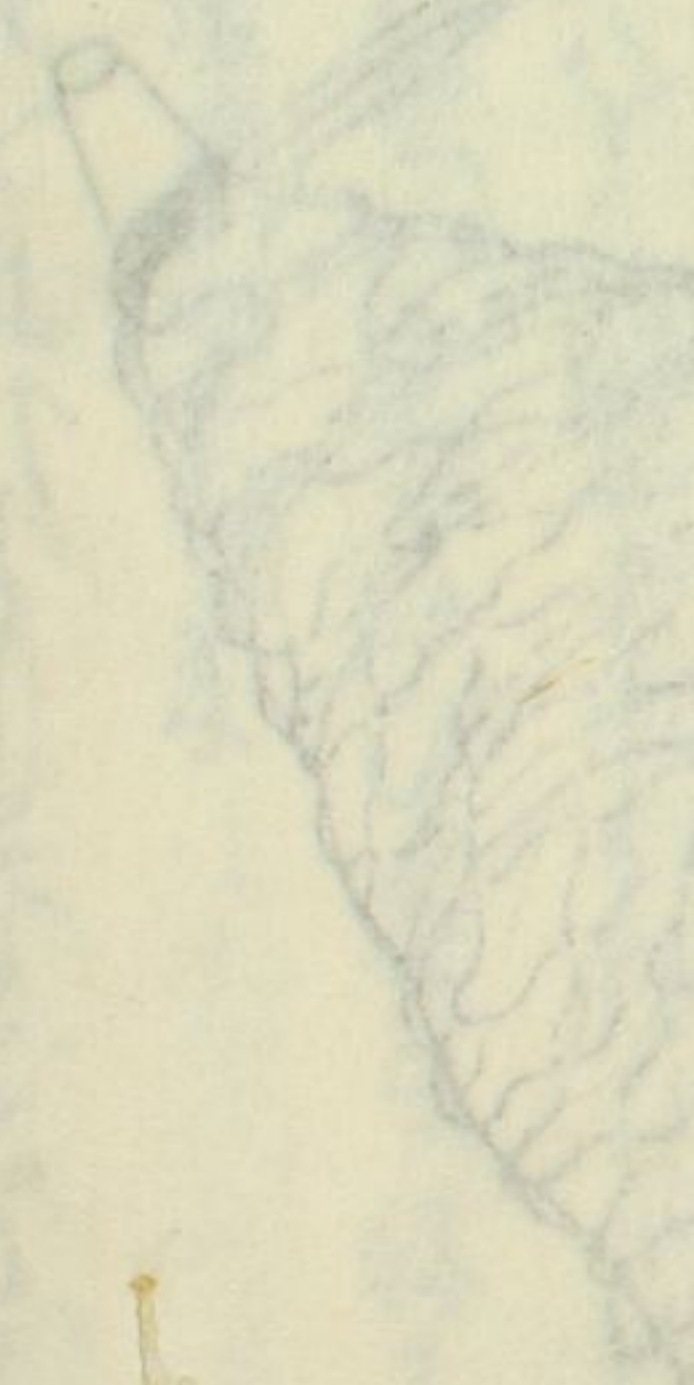
四寸五分

四寸五分

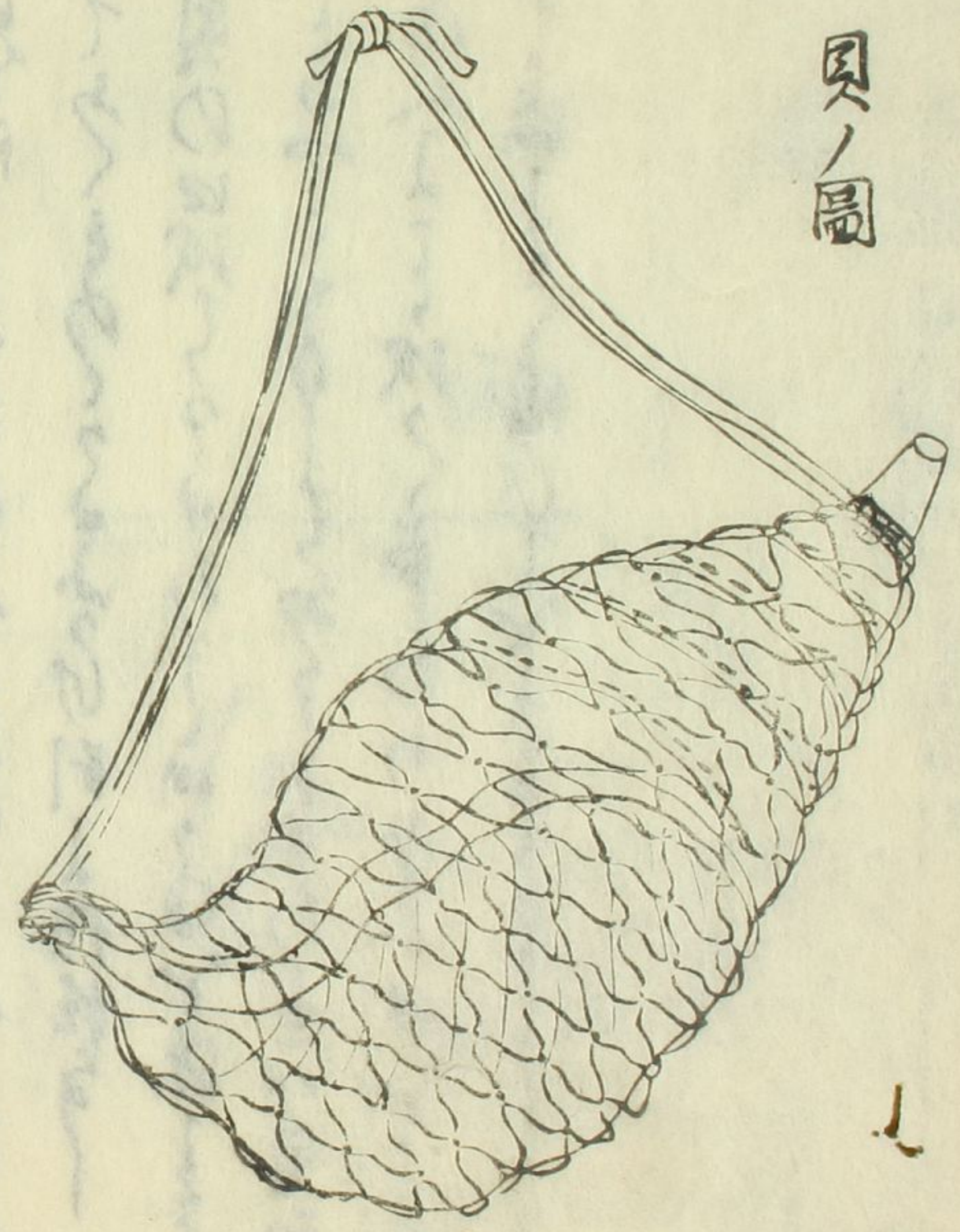
〇二 櫛の事

いと深しきちりよよおのわごと無縁紙舟
てうくものころよりの別し作はす

二 貝のはげたるうあははのいよはよま
とつらなりとあはらるあまづ貝あはら
ゆへよははげく事ありまははよま
てはよまはげりてまはらるのうま



貝ノ圖



赤キナミ

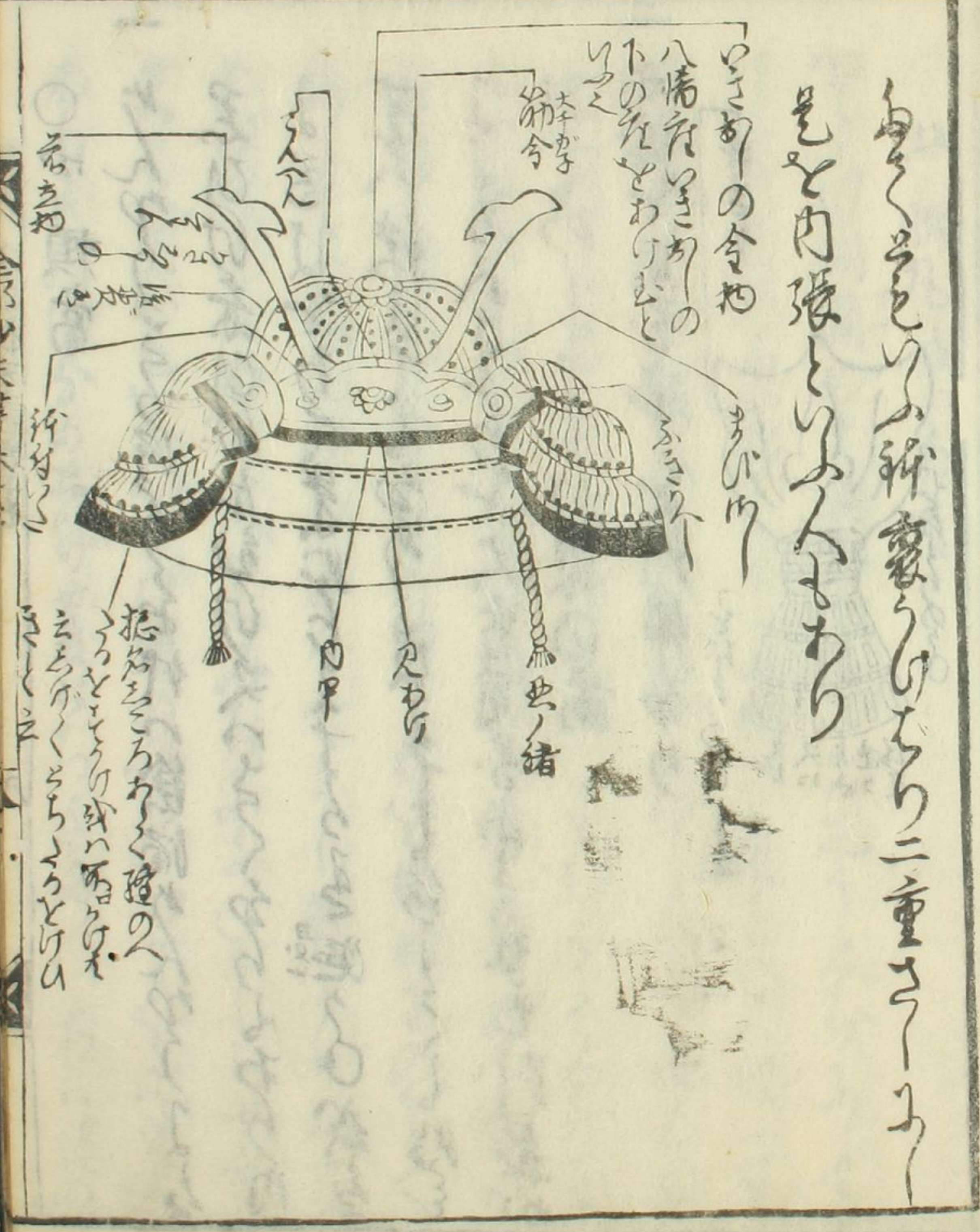
○三 敷^{カサ}の事

一 甲乃鉢^{カサ}久くも^{カサ}波^{カサ}ありはく^{カサ}なり^{カサ}推^{カサ}ありと^{カサ}代
 ら^{カサ}異^{カサ}類^{カサ}又^{カサ}秋^{カサ}どう^{カサ}引^{カサ}く^{カサ}を^{カサ}名^{カサ}と^{カサ}用^{カサ}は^{カサ}か^{カサ}そ^{カサ}ふ
 物^{カサ}よ^{カサ}多^{カサ}う^{カサ}す^{カサ}細^{カサ}四^{カサ}方^{カサ}白^{カサ}筋^{カサ}所^{カサ}よ^{カサ}又^{カサ}板^{カサ}甲^{カサ}六^{カサ}枚^{カサ}十二
 枚^{カサ}を^{カサ}り^{カサ}そ^{カサ}れ^{カサ}び^{カサ}せ^{カサ}う^{カサ}そ^{カサ}ち^{カサ}を^{カサ}め^{カサ}ぬ^{カサ}一^{カサ}唐^{カサ}冠^{カサ}南^{カサ}蛮^{カサ}
 所^{カサ}よ^{カサ}多^{カサ}う^{カサ}く^{カサ}も^{カサ}甲^{カサ}よ^{カサ}の^{カサ}所^{カサ}甲^{カサ}大^{カサ}中^{カサ}小^{カサ}の^{カサ}が^{カサ}ち^{カサ}ち^{カサ}
 類^{カサ}改^{カサ}改^{カサ}甲^{カサ}ふ^{カサ}じ^{カサ}振^{カサ}葉^{カサ}が^{カサ}類^{カサ}改^{カサ}の^{カサ}能^{カサ}さ^{カサ}る^{カサ}時^{カサ}よ^{カサ}か^{カサ}ふ
 む^{カサ}の^{カサ}所^{カサ}甲^{カサ}を^{カサ}く^{カサ}う^{カサ}の^{カサ}所^{カサ}よ^{カサ}う^{カサ}り^{カサ}て^{カサ}て^{カサ}一^{カサ}類^{カサ}記^{カサ}ぬ^{カサ}り
 よ^{カサ}移^{カサ}と^{カサ}も^{カサ}大^{カサ}形^{カサ}ハ^{カサ}か^{カサ}さ^{カサ}ひ^{カサ}を^{カサ}さ^{カサ}移^{カサ}と^{カサ}見^{カサ}若^{カサ}し^{カサ}
 ら^{カサ}び^{カサ}う^{カサ}か^{カサ}白^{カサ}檀^{カサ}の^{カサ}事^{カサ}わ^{カサ}り^{カサ}朱

二 網よの目根^{カサ}と^{カサ}道^{カサ}代^{カサ}う^{カサ}す^{カサ}を^{カサ}さ^{カサ}る^{カサ}人^{カサ}の^{カサ}首^{カサ}わ

うぶ力よそめてしうろく又まの鞠又腰をよ
 蓋の下のまんま系むくよ縫のべまうびを引む
 むめぞらひひーそらつろくわりのちが皮よそつ
 びわりのちらつひの板細い又板さざり何枚裁さ
 かりよ推シイ山カタラみち矢まづぐーらよよ糸中さ
 糸しやうきうーら次ゆーちのひの結つひ二重
 う西布くつらんあーうろぶらきで厚んよ思お
 ーわりわびむら八幡布そと云中びさうー(音)
 せびさうーのありーまうーかいうあさびいろく
 むりきき肉どい糸よすりやき志の教文は
 とまて板ハ糸ヒ立脇タテ立角タケりー或よかろくひ

是と内張といふ人もあり
 是と内張といふ人もあり



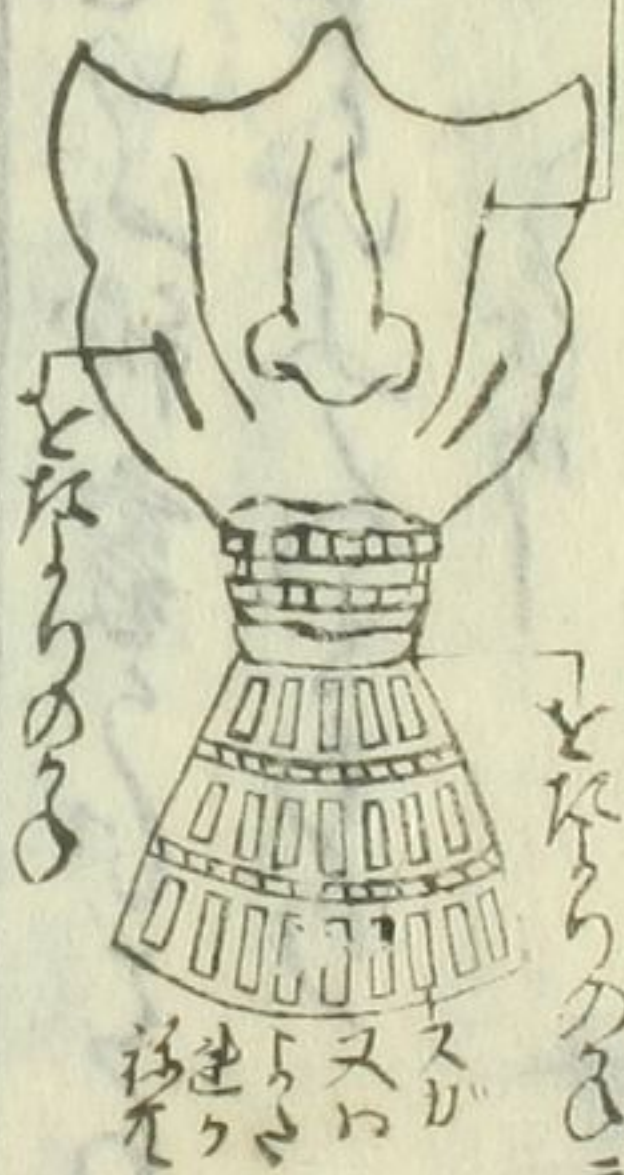
八幡布の令相
 下の糸とわびむと
 糸
 糸
 糸

振るるころわく種の人
 ころをこころの成り香をひ
 云とけくさうさうとけひ
 云とけくさうさうとけひ

〇四 頰膏

一 けんやうとらうほうを竹の陰隔りんやうよと
 思ひの赤ひげかむり又のさくありもわり内
 よるはとわてまならよすりまヨシの或ら
 すがハ鉄よてもあり一皮よてもありヨシも好
 よすり又さざりとも大方用ふふさヨシも引鼻が
 けさる一すざけ浪の齒

二 咽輪と用ふ事を代稀あり

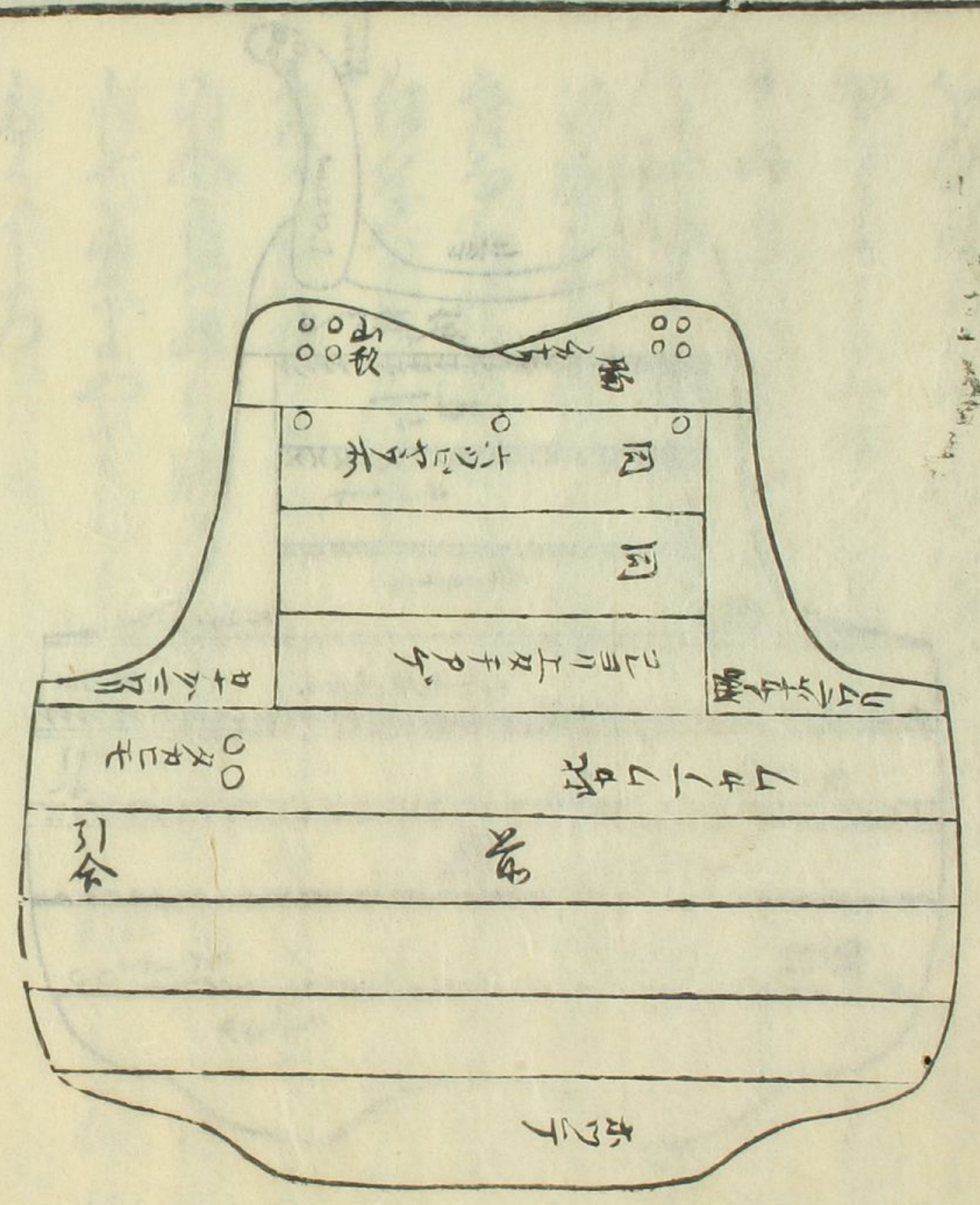


洗冬リ

とらりのの

一 丸 咽尾 或のあて

一 竹ざけ咽桶フケか咽みぐさよびやうとらみ
 竹の尻乃大木の物ヨシまうの板の廣さへ大形一
 二三分一板大るれい鉄よむりわり板を三
 又七枚ヨシも一葉とらヨシもひかめさヨシよ
 も一とらヨシかざけ咽も一枚よ打のへさヨシ
 を板よむりわりて弱一板と桶かヨシのよとく
 め一と一枚よぬりヨシとらヨシ昔ヨシより大ヨシ
 めはせヨシもわり又いふみりふさヨシら中實ヨシ
 矢たるげヨシと引よの縫のべわいヨシとぶ縫も
 わり毛引ひかめとらヨシとらヨシとらヨシとらヨシとらヨシとらヨシとらヨシ



六胸下地

一乳をい何尺何寸廻り但肉のりよてけらん紅の
 下よて何尺何寸とあるよて天とある一胸た
 右へ廣さ何尺何寸のりよて肩より何尺何寸
 高さを何尺何寸同前線ト一とく高さを何尺何寸
 但くりあめけり筋の穴あり同後よりく高さを
 何尺何寸同胸板高さを何寸何分綿齒毛を何
 寸右廣さを何寸 是と肩 高さを後 神くく一毛を何寸何
 分板板何枚脇のくりあ何寸何分

わりの様ニテの糸長短物とわり惣をさうらう
 とる皮びらうとぞう綿るどよてゆひららじ
 もあり軸よ高のま又高ふ物よわらして不
 鳴るさくさく山道の板一枚ゆひららむまあり
 又金銀の金物わり草摺よと一の板二の板
 とつらやわり草のけさんよ鼻紙入下の
 板へつらぬがゆらきて一三の板よ仁垂てあ
 一糸よひはくを捨る糸の糸より胴へ糸
 と糸よびらうん切り汗よとさうらもわり
 ○九大神中神小袖をさる

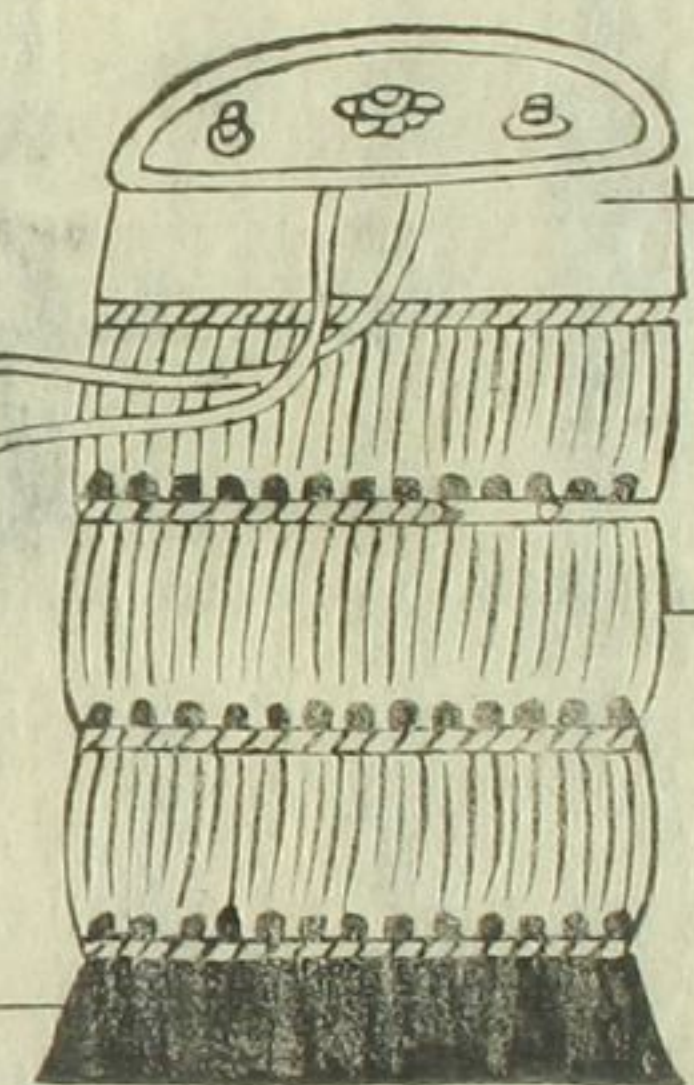
一 大神わけも糸のこしんわり中神小袖たど

一 腰うのうらくわりの大将をら縁げ不用故
 よ毛引糸金銀の紐子繰又の縁をら皮と取
 けく金銀のるくつらんとさうらもわりの通代た
 かくら不用

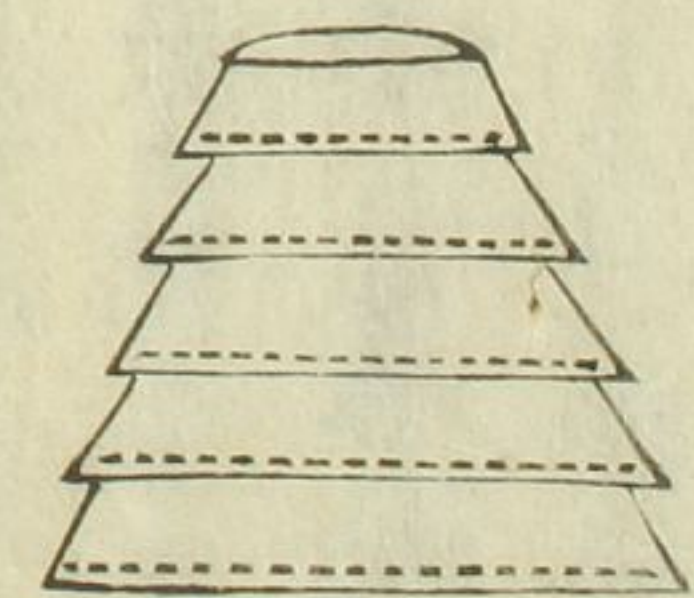
金部抄

カフリノイタ

拵名袖



ひの板



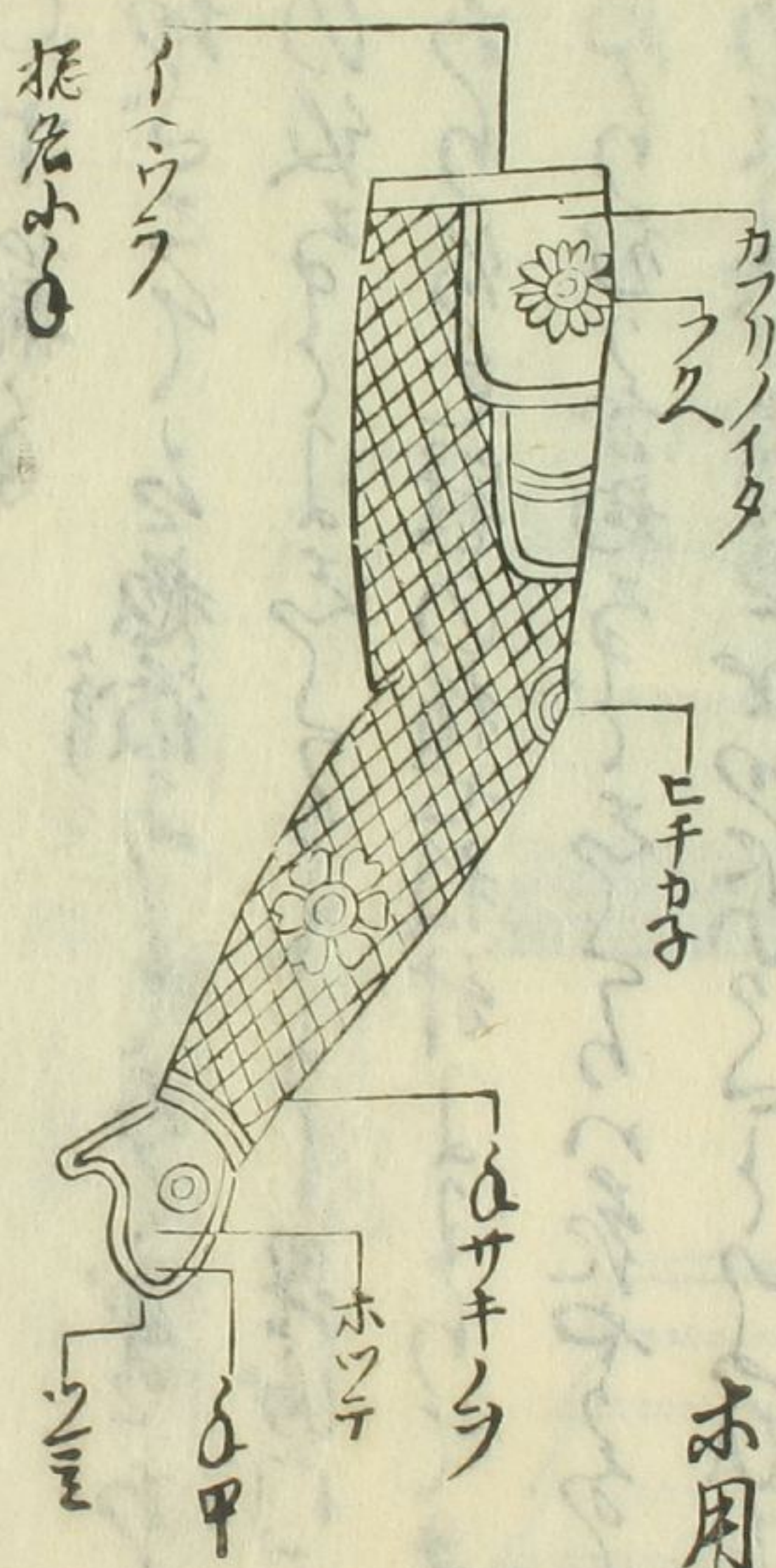
袖ノ裏也
裏ノ板が
たつ針金
ノ袖ト云リ

相引ノ緒ト云併綿咄ノ上ノ緒ヲ相引ト云
或はニ袖ツキノオト云リ

○十籠

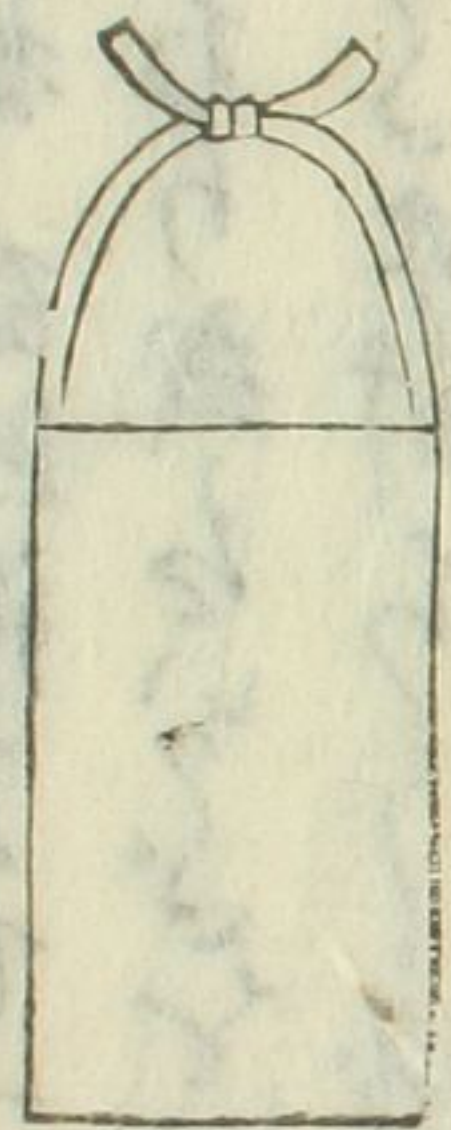
一切ごころを惣汲みてあぐ海をわりの是と云
の紋をよと云ころも一ノ思少門こそは横板
わりのは冠の板七枚計よと云りて来るほどよ
わりのわつか相もと云ころは花やうあり冠の板
の次よああると云に云ころはひぢり子あり
よと云ころよもあ紋の紋かと云略一と云ころもあ
しと云ころ七ツハツちりまのせりんあふと云
わしと云ころ海よ八重くさつりニ重瀬といふと
あふあしとのすあたるを海とは南重と云り
ありよと云ころ海をよと云大あつりりやと云

ありうらちちりしに二を後よありのち白
中ありのこころもたあさうけらるうこた
こころをけらうけらるもあさうけらる
板の内よりこころをけらうけらる
すまじくあさうけらる布さしよあさうけらる
お用捨あさうけらる



○十一脇ひき

一けりまをさひきまきまきかかんり成るこころせり
わり又ハ中しきまきまきと胸と二方こころを
よすまもわりとつども奥よ圖とありあり
て脇ひきもありあそひの龜の甲を用さうけらる
下書とらふあはれをよれいけりあそひも用た
く働さよはゆあり



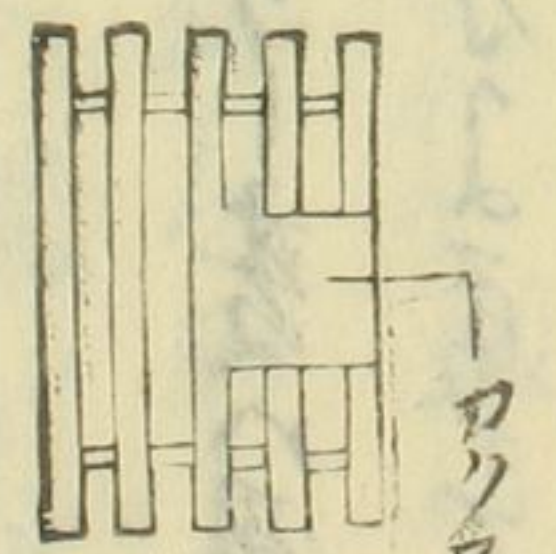
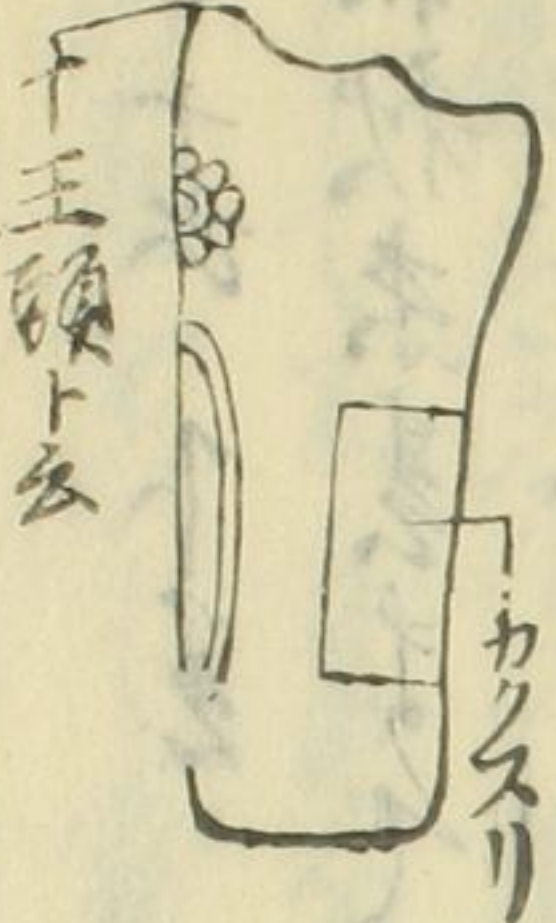
脇引

○十一脇引

○十三 脇膏

一 十五寸一尺の間の上の襷のようす又方角のこみ
 ころの時間一とあり襷の物ありころもあり襷
 のせろくくわり圖は奥あり志のさくはすく
 した平式志よりころくと倍は中をくくろそ
 のよ志の七八九十二三のりよ色して二重海とて
 つゆさくひのころのころを可計する皮急の
 甲とふくくさのりよの皮より細敷のるく
 てがぬさく、或がころくと結の打結成用

なべの巻



○十四 脚指

一 絹布びらうごうのり纏のあえ布成二重さ
 一 よまららけ^キ襟^キ或はかぬ^{ハキ}脛^{ハキ}巾^{ハキ}とくろく

○十五 足袋

一 本綿と二重合て麻とてつくさうせぬ目成印
 へて者のあひころのいさく大気なるてく

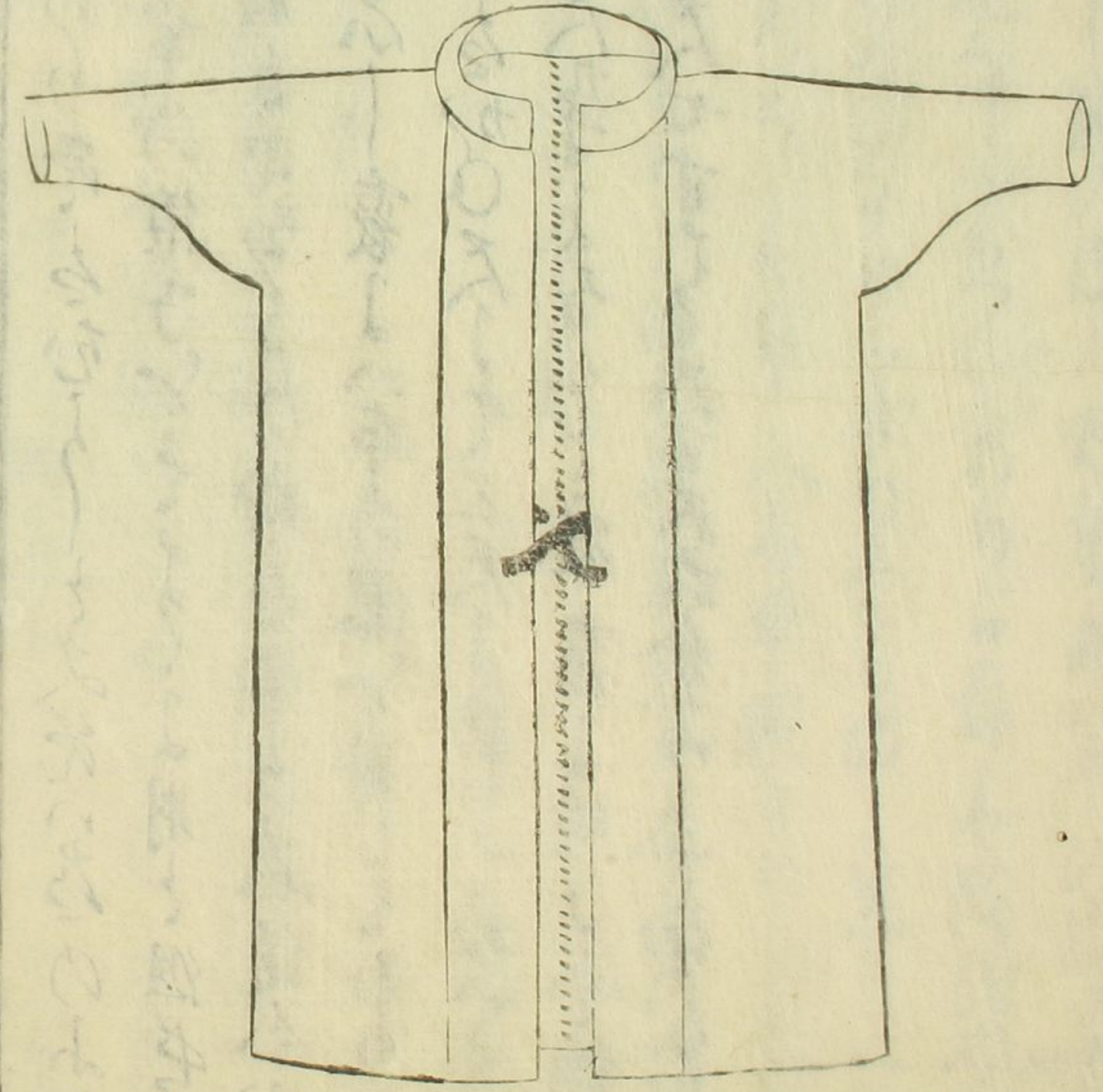
は立ぬる。然の皮乃頸骨或ハ半の皮也。和
草と履るす。色く。わりの古昔も。戦務也。今
いある。り。ひる。り。く。ご。り。き。ら。故。よ。恙。も。く。ご。
ま。り。り。ろ。ろ。く。も。た。く。ハ。車。戦。ら。り。く。く。と。と。
と。騎。戦。な。り。と。同。く。武。具。志。之。今。世。の。い。ぢ。
く。き。ら。り。の。も。る。あ。ん。

○十六 下巻

一 初秋未甚す。く。を。捨。り。く。麦。ハ。瀑。布。一。疋。く。
く。く。と。又。麦。を。温。氣。力。ハ。通。ま。く。海。く。疾。為。く。
綿。と。水。ハ。視。く。く。て。肌。よ。ま。く。く。ら。ぞ。く。く。と。

く。人。わ。り。冬。く。を。む。く。く。と。又。冬。ハ。お。の。ふ。神
麦。も。常。の。帷。子。と。そ。ま。く。く。は。用。と。組。む。く。
く。て。不。自。由。あ。く。ん。り。或。を。面。く。く。毛。後。今。織
の。美。と。ふ。く。裏。ハ。ハ。布。の。潔。と。用。ら。も。わ。り。仕
立。や。り。も。か。の。尺。く。く。と。二。尺。ハ。な。り。て。ぬ。い。く。の
ま。り。二。尺。九。寸。よ。る。り。と。衣。裏。ハ。後。子。全。欄。所
也。と。一。尺。七。寸。と。み。す。又。六。分。あ。く。て。け。ん。と。を
わ。り

下衣圖

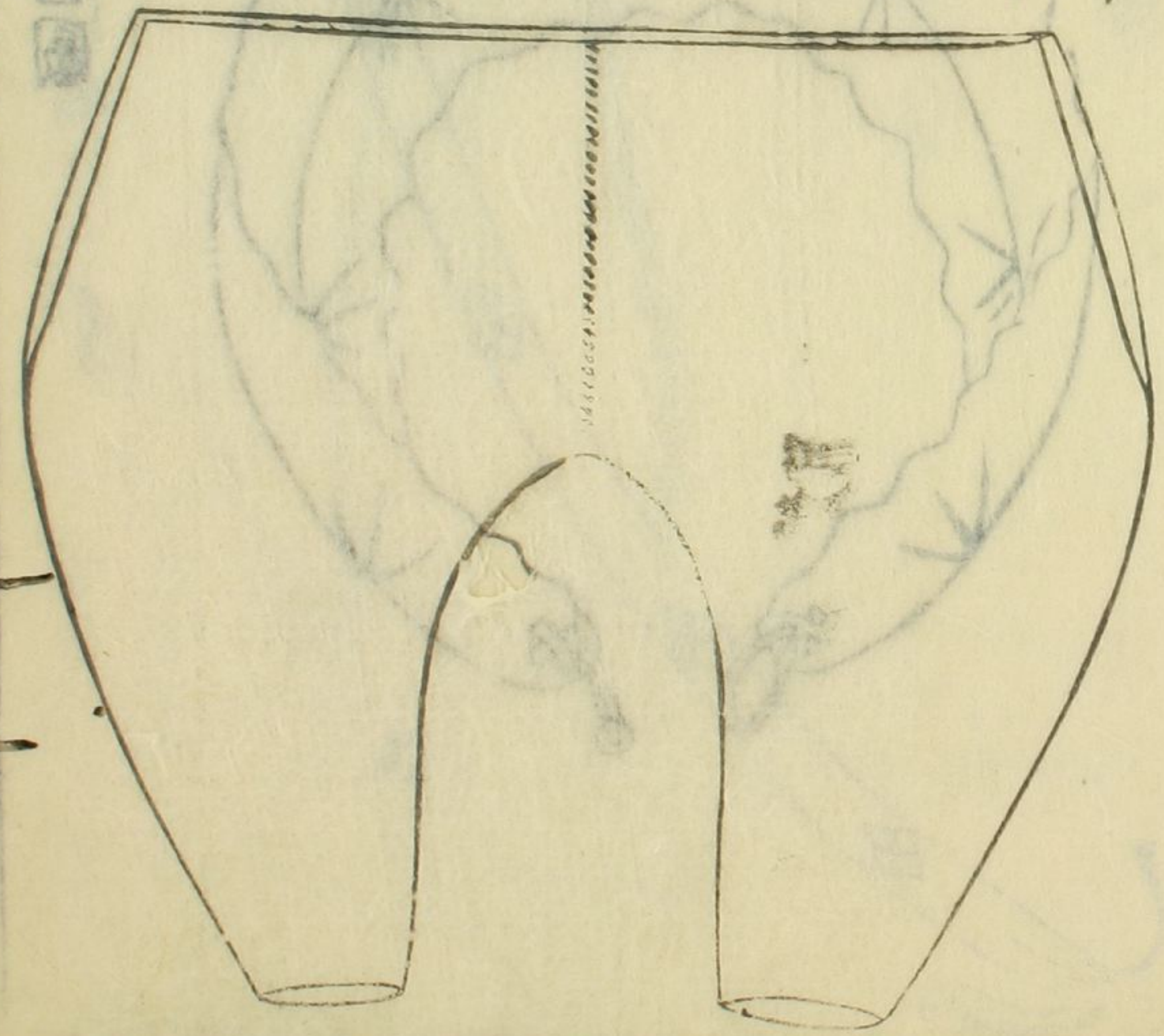


金部抄書卷廿七

〇十七 小袴 絨い

切つらん又いり
引といふ
一鳴りよあし書
ふふ及

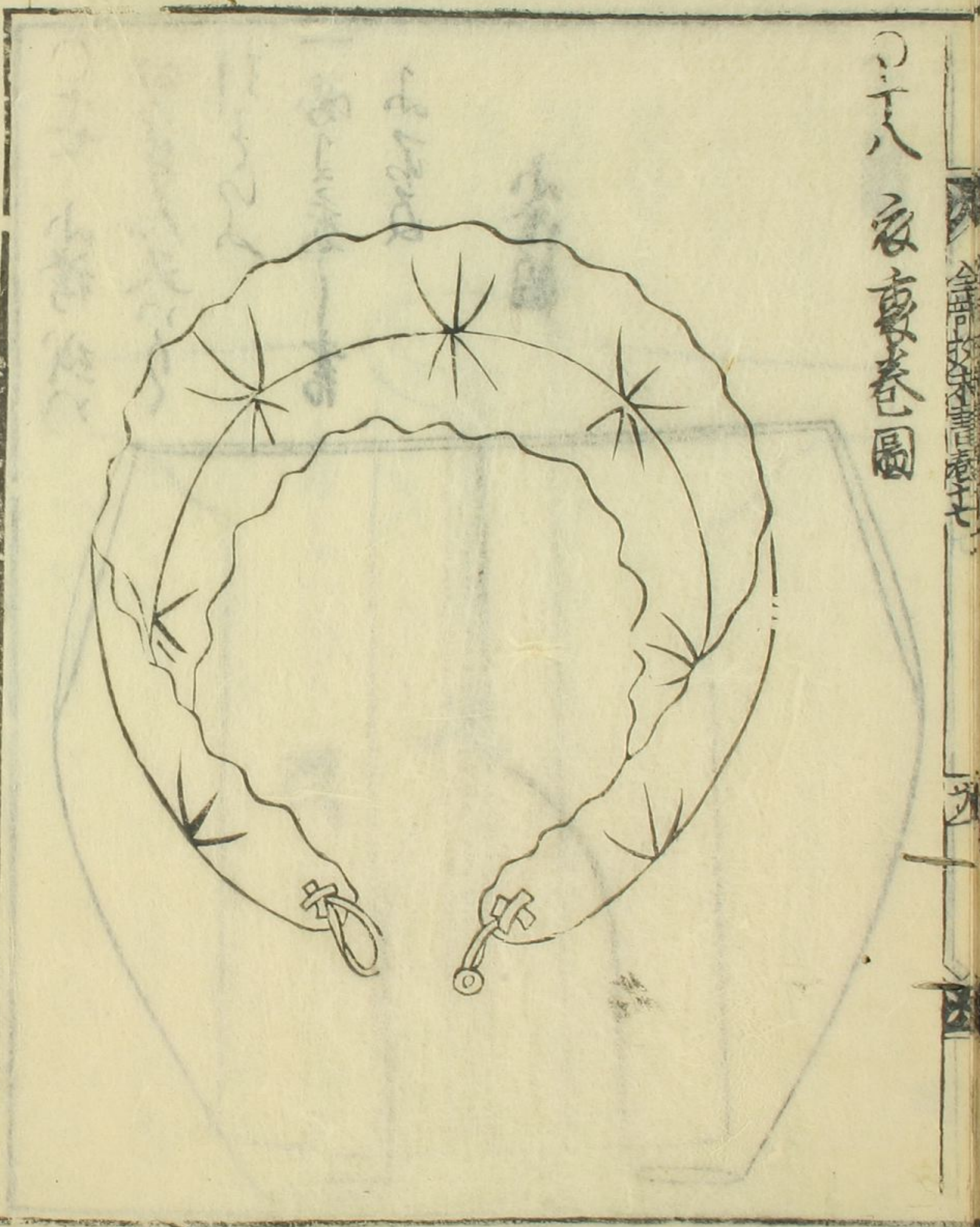
小袴圖



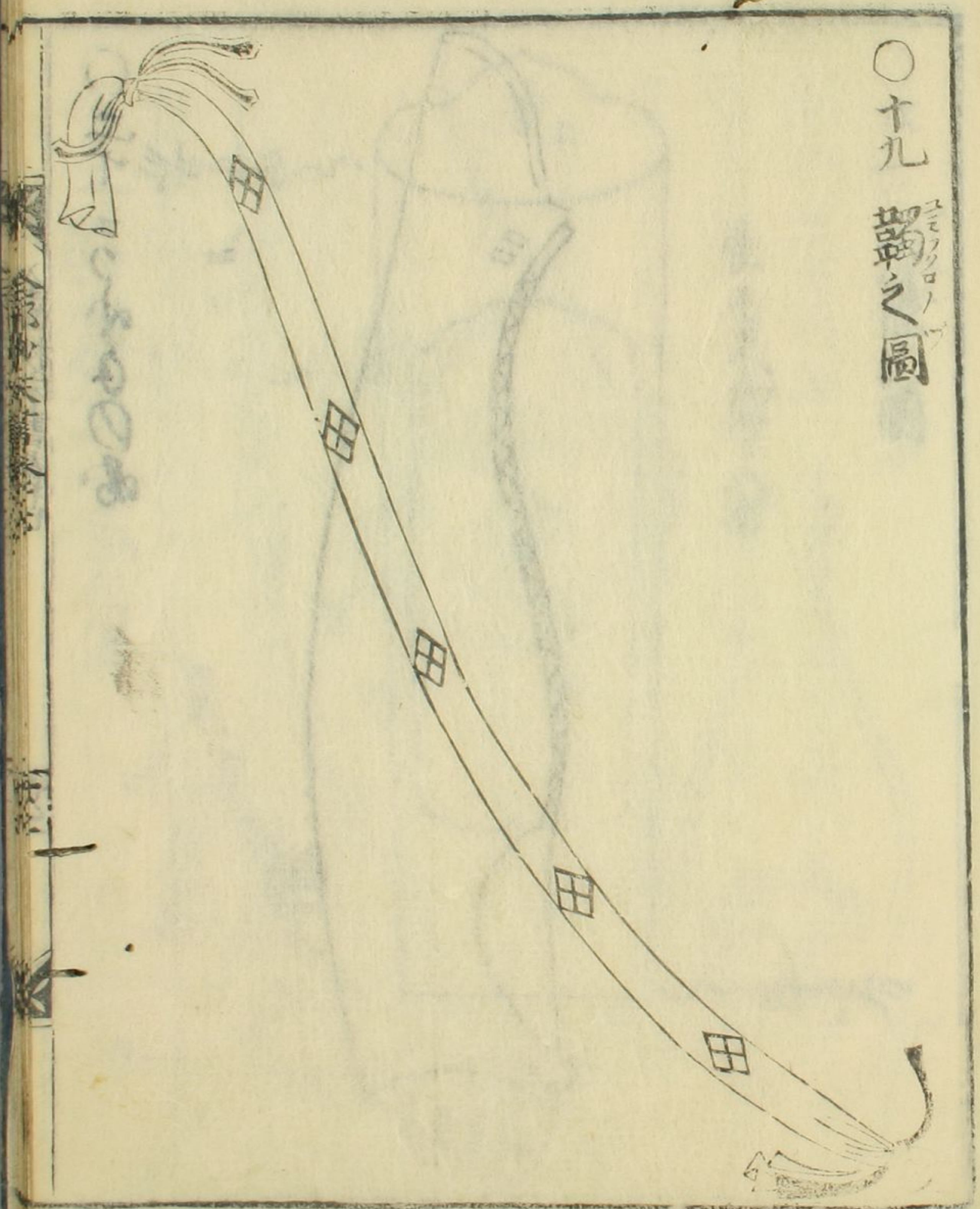
〇十八 小袴 絨い

金部抄書卷廿七

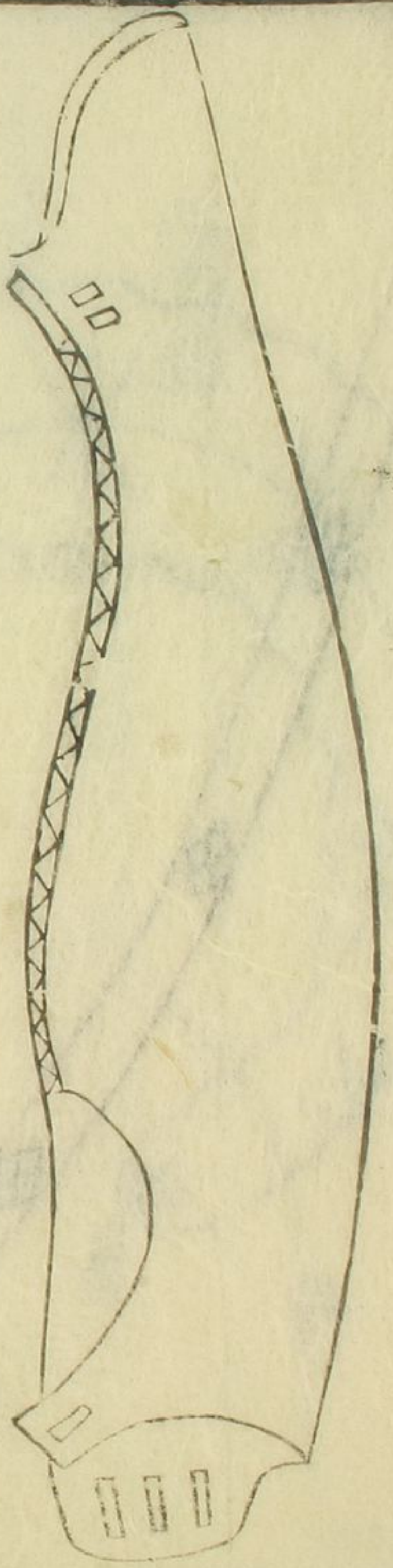
○十八 夜裏巻圖



○十九 鞆之圖



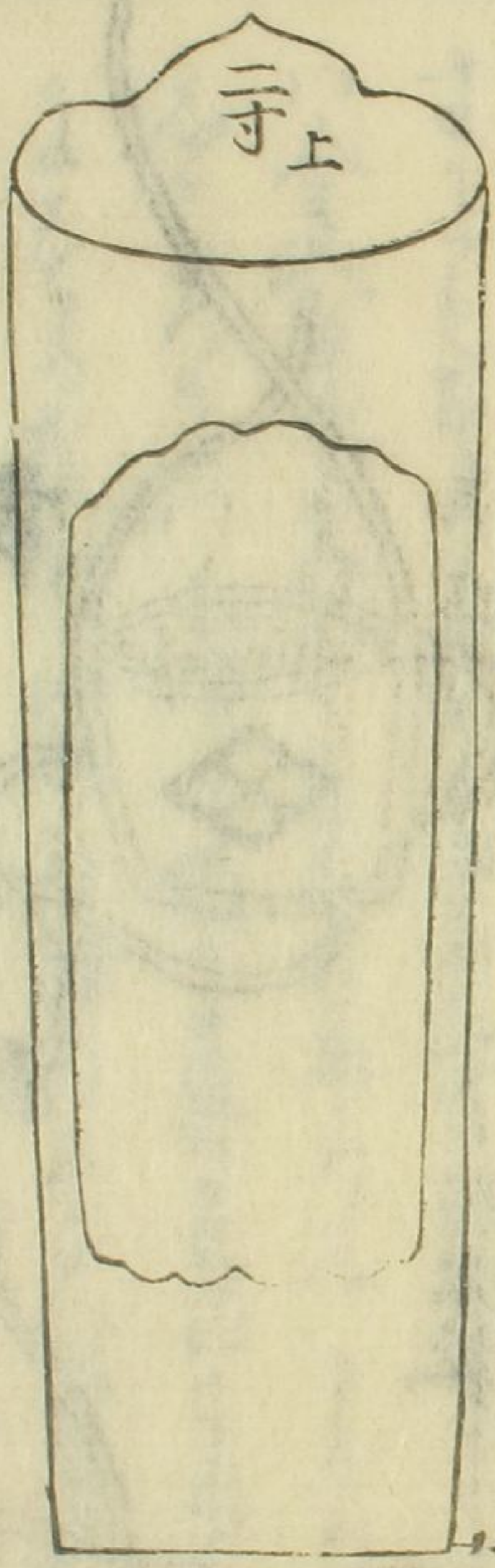
○二下二の図



金部抄末書卷七

○一上切線の圖

長と尺一寸五分



手

手

○二下二の図

二

○廿二 胡瓶菊三色の圖

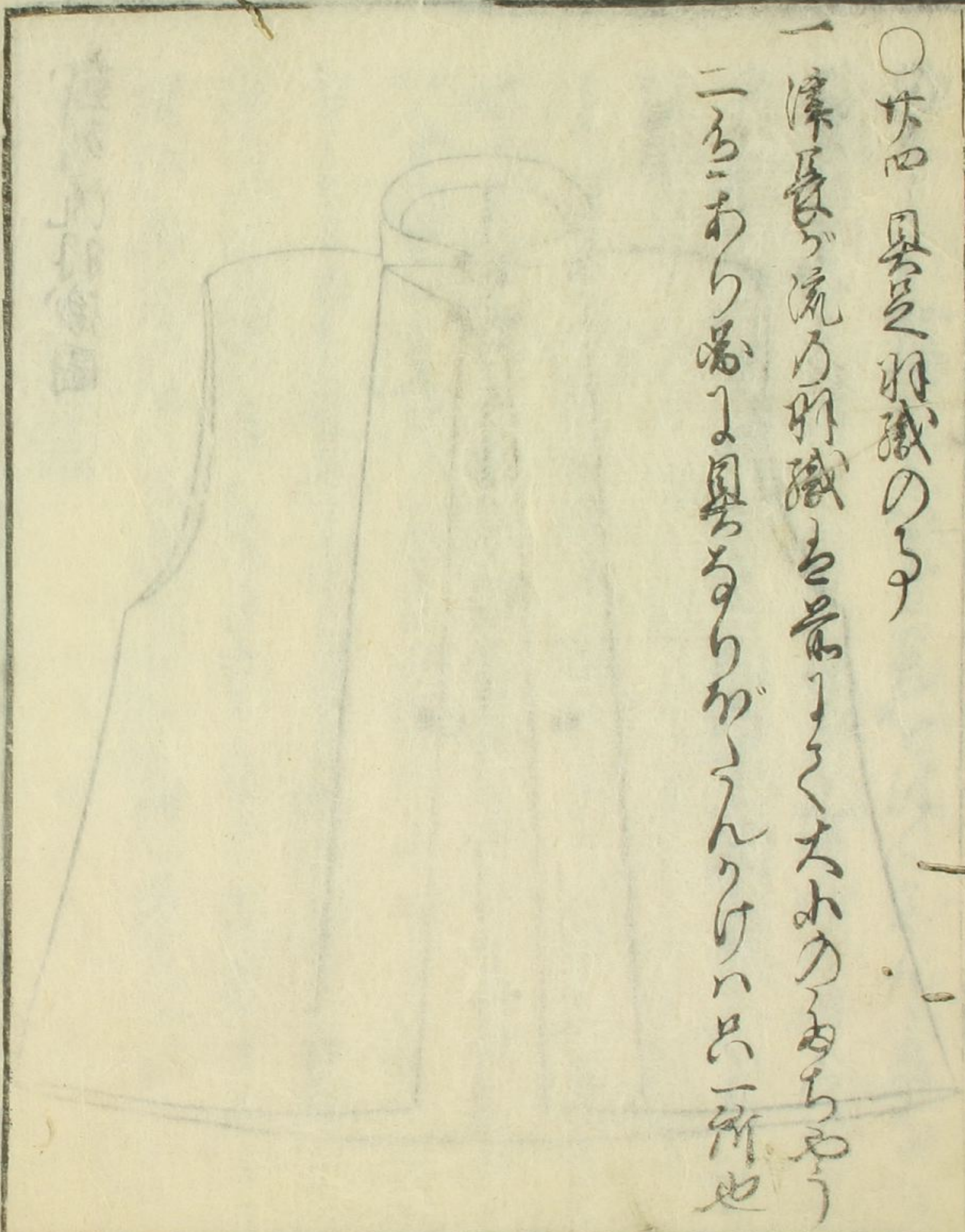


○廿三 貝足形織

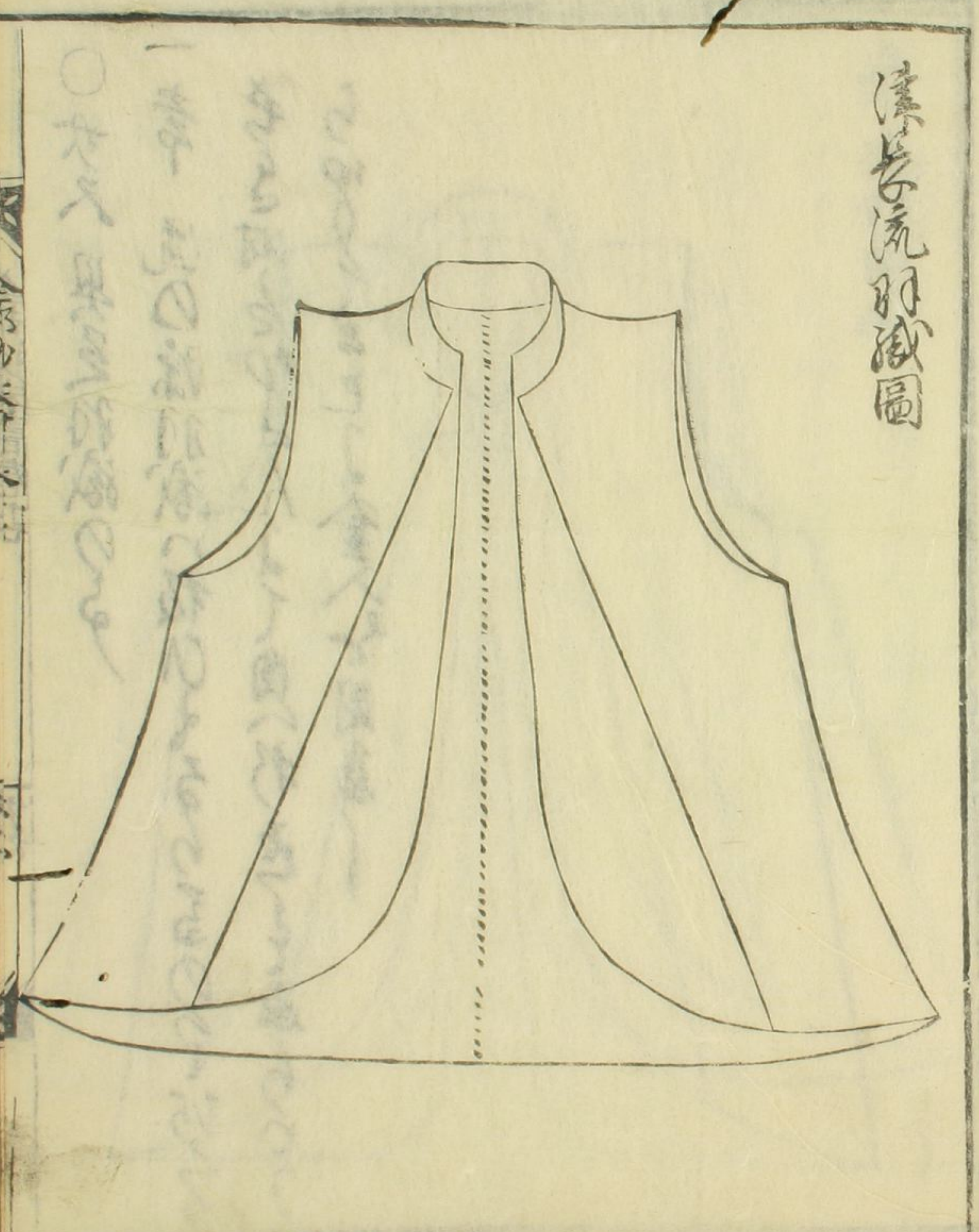
一 玳瑁流の形織の長式尺九寸或ハ式尺三寸一より
 短きとハ腰をれて見ゆる一きく不用之式尺六
 寸一もさるありきよ三寸但女ありるもの意
 い合入るどまへくよさるありていさうりさるてい
 ちころよつうゆらぬよ貝足のこころりし織す
 よさるなりぬありゆりき尺六寸又各がえん
 とわかとあらかしくむとびるまじおしのさへは
 べたぐびまのりかうんい天糸織時ハたぐびの
 裏とちうさるていさうひんがうんようさるり
 同様のうあよ中かどにかうんと糸らたぐび

○坊四 具足羽織のころす

一 襟長が流り羽織と云ふは、くちわのめらるう
二 ちこありあゝ具足なりか、くちわのひらひら、只一所也



漢長流羽織圖

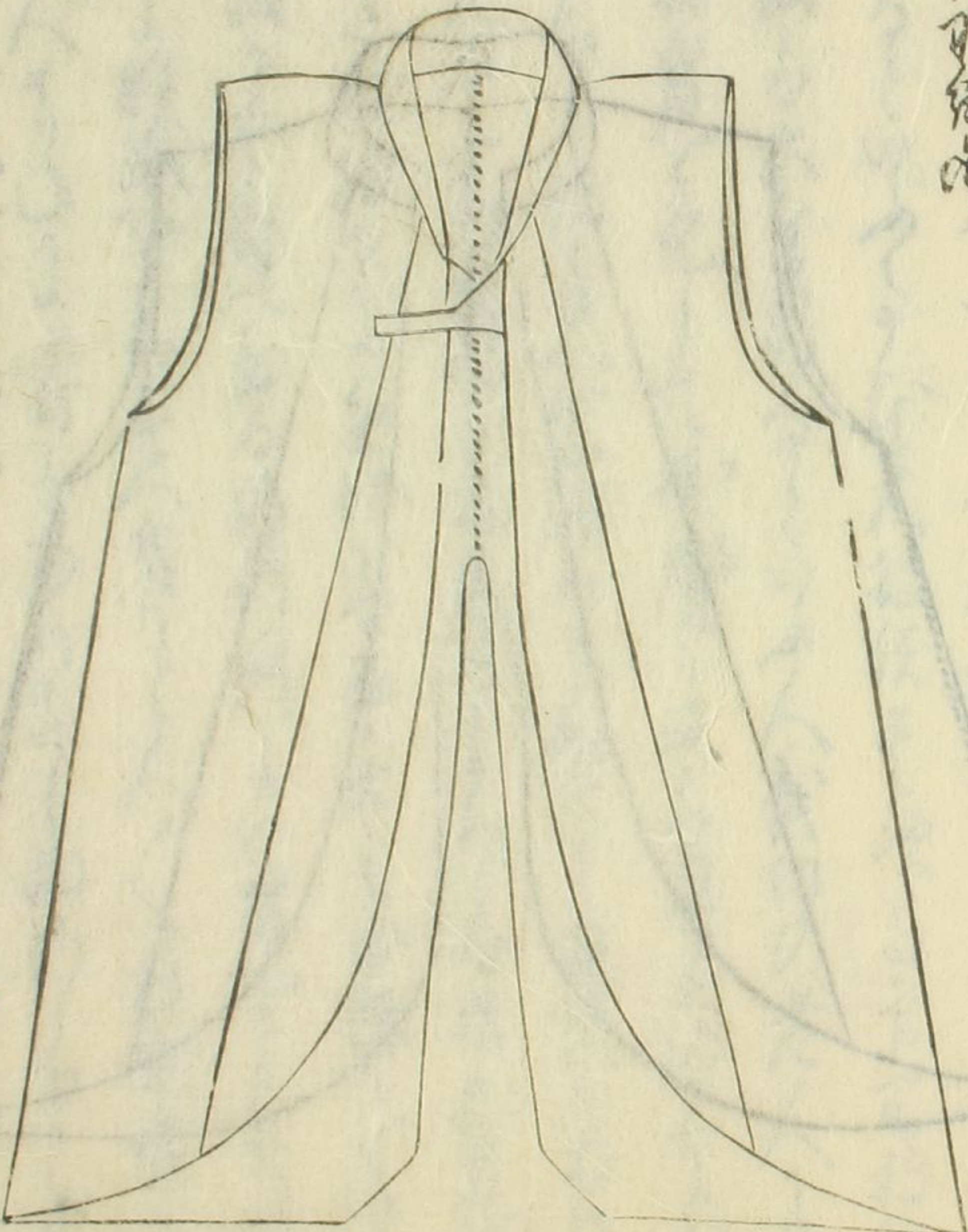


○大ハ 羽織の図
一 羽織の図
二 羽織の図

○女又具足羽織の事
 一帯流の疎羽織の板ひもるりるの事
 此の羽織がうんよて内へ折る事あり
 らりてとてよ金入を用る

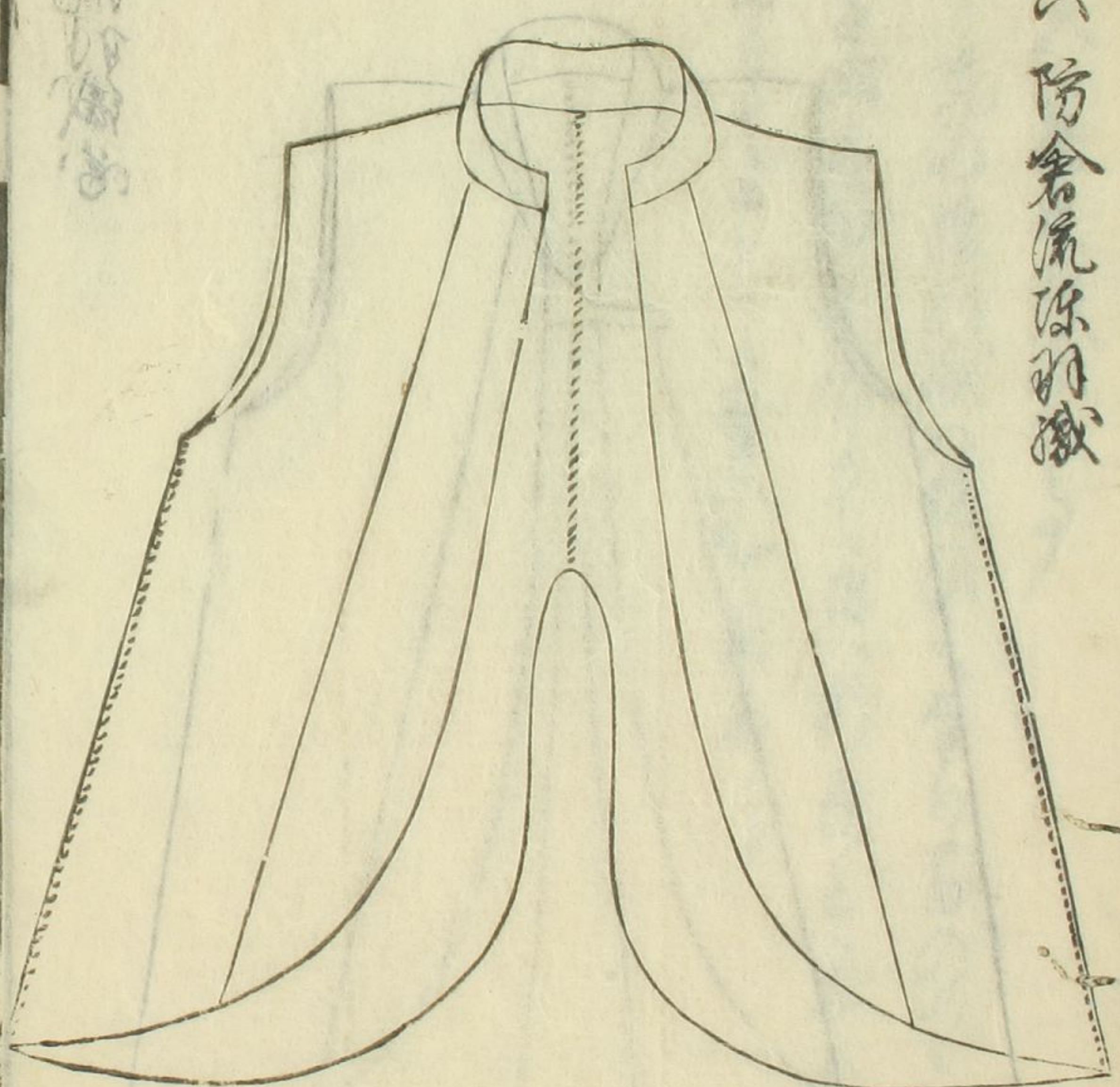


常流羽織



○女又具足羽織の事

○廿六 防舍流珠の織



防舍流珠の織

それ甲冑と帯一々拵物とさうごとく織成は
 ころしつりつり大拵物を次る事可拵の士
 り或る大なるものより人裁切の若人より
 大拵物と免しつ後膚り又る具足の工より織
 とさう一様より人裁切り下知さう一様は
 かん平士の帯とさうよりより拵物拵物
 らさうに拵りつを作ら平士もお誂るごと
 の時より拵へむもの列より帯とさうを
 上より拵織とさうより人裁切り人へ
 又人裁切りより拵物より拵物より
 人裁切りより人裁切り拵物より拵物

立の用意すくとも事な理よくくす月日
端

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

信玄全集末書上卷之十八

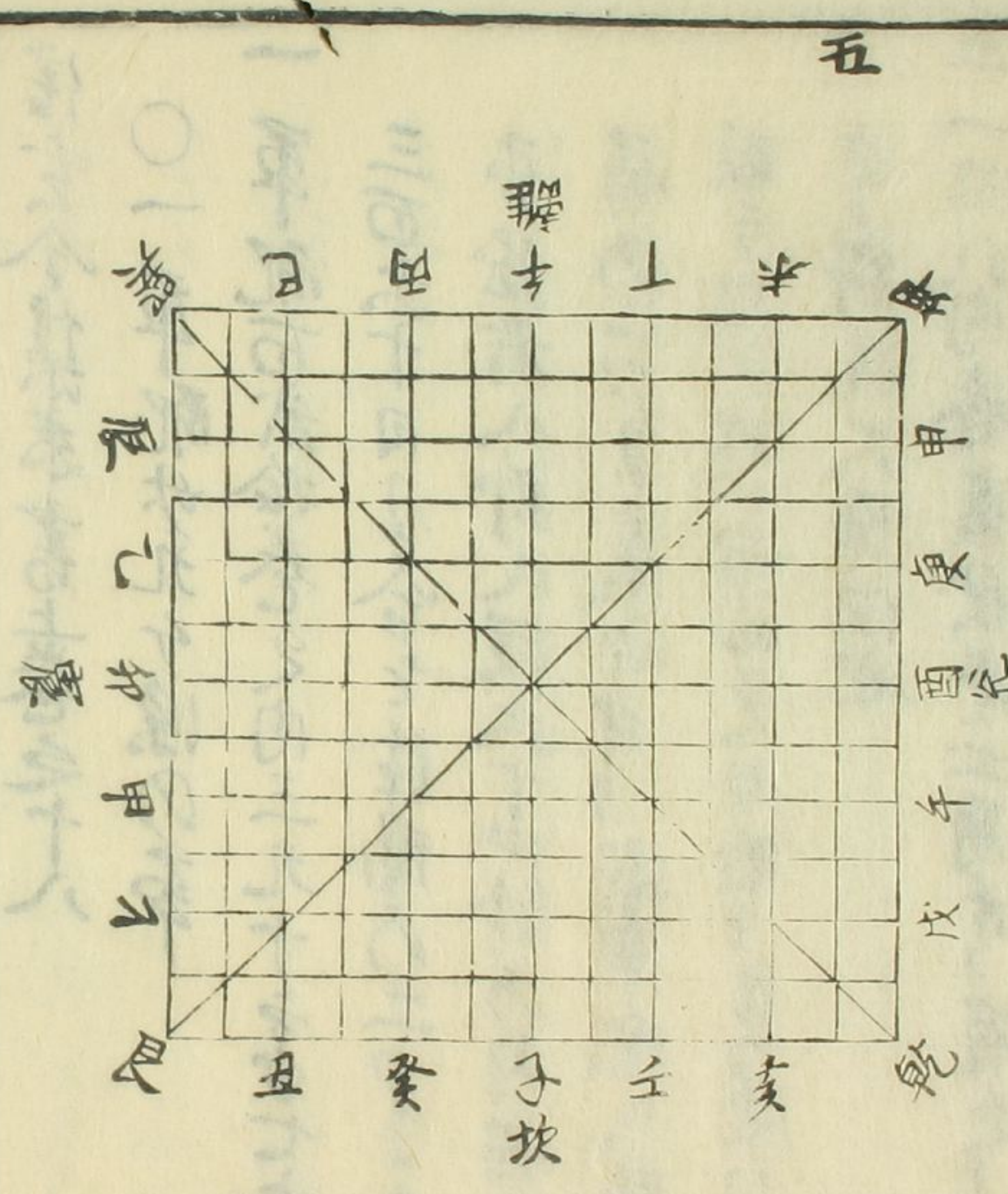
○一軍配廿九ヶ條の事

一軍配百貳拾卷之内三九十字七字の根元成以
三百六十日よ合を陰陽の二つよ分て右左と見
る然者八卦八段六十四卦の内禍害根元を以勝
負の二つよ定也付リ右軍配八卦相尅ノ二性ヲ
取テ以テ以心傳心之日取ト定是ハ謙信家ニ用ル
字野流大極位也

二一日の内春夏秋冬土用ヲ有之ト用ル其ハ又口傳
る是ハ小笠原流と云ふ軍配也

三一煙 二雲 三風雨 四鳥丸 五龜鳴字丸

四 因の勢多可考也
敵城を攻む時旗を成いしよこふなり



六



申子辰冬
付、此時ハ申辰ヲ水ニ取



寅午戌夏
付、此時ハ午戌ヲ火ニ取



亥卯未春
付、此時ハ亥卯未ヲ木ニ取



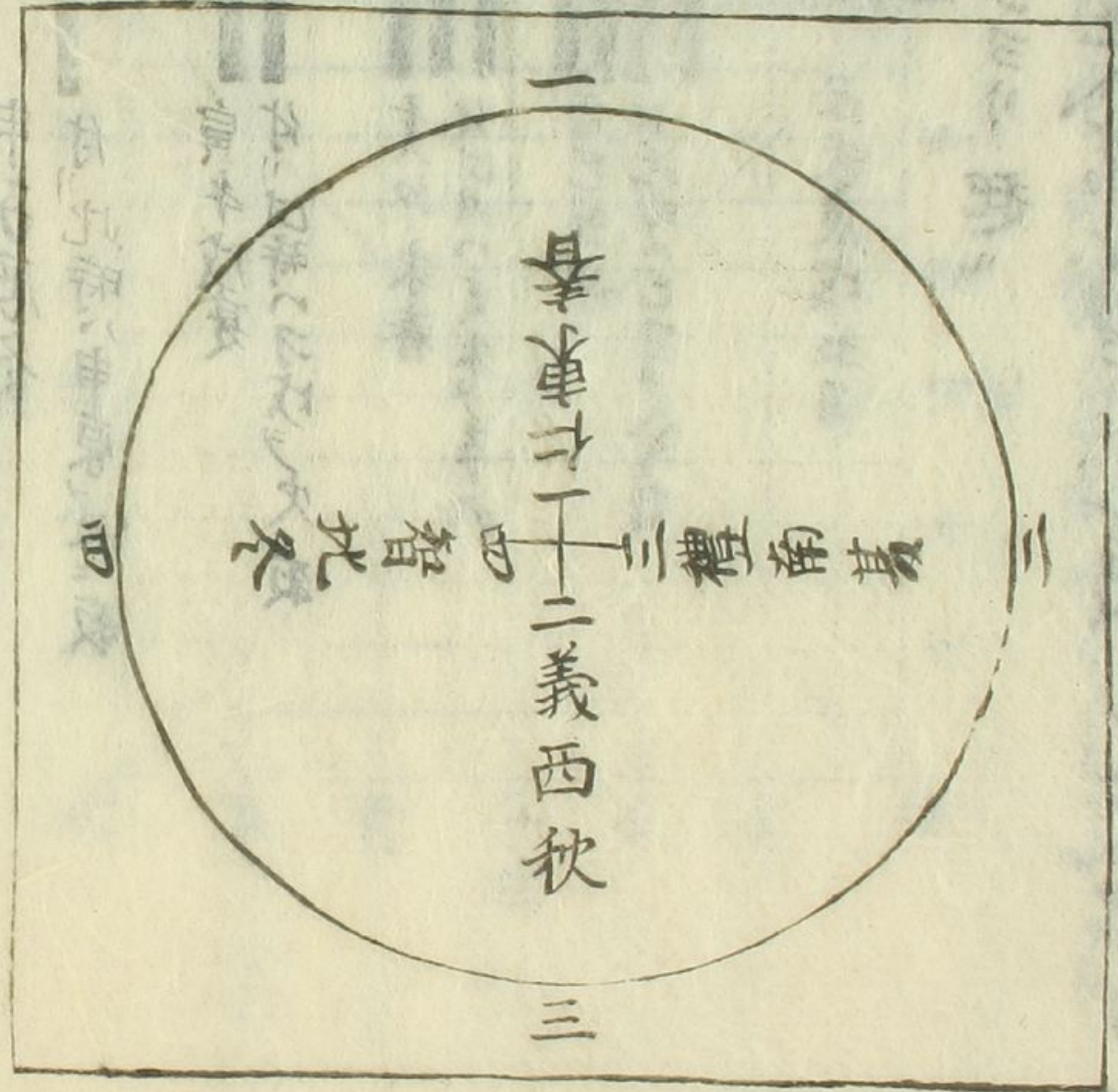
酉巳丑秋
付、此時ハ巳丑ヲ金ニ取



丑未辰戌土用

一 六ハソニヨリ起ル

七 破地鬼入格と稱人々を教して石を報する事ありといふ
破地鬼入山伏と見えか、成致は七昌位云



九 二十八宿之事

室^骨 日月火水木金土

壁^{起風} 一室奎鬼軫角女木

乾^{二奎} 二參柳心尾婁元火

婁 三壁畢虛危斗土

胃^三 四胃星張箕金

兌^四 昂 五昂觜井翼房水

畢^四

觜^五

參^五

坤 井 十破軍ノクリヤウ時四去月教又正五九一

軍配一部、固本半、今宣就、三寫請然、一卷、七不明唯大星計也、初、九孤處或夜、破軍破同破軍尾返

右日取萬、五軍配之事、人申不審成、五見吉亦、一イ、ス、ノ、偽、一不用大、三吉

赤澤太郎右衛門、三傳受、ス堀久太郎軍敗者ナリ、益田氏部、三傳受、レナリ

鬼 土同尾 六 取前半後 長日者至 四半者同

柳 土、一夜、一辰、一後、一而、一敵、一向、一又、一南向

計次

離星 十三王相八節 旺相 死囚老

張 十四牛宿取様 日中不 南向

翼 十五摩利支天之方 起風

軫 十六世祖處、クリヤウ 起風

巽 角 十七旗色

元 十八風之大事

處 十九鳥之大事、一キ、一サ、一コ、一ス、一夕、一來、一様、一性、一様

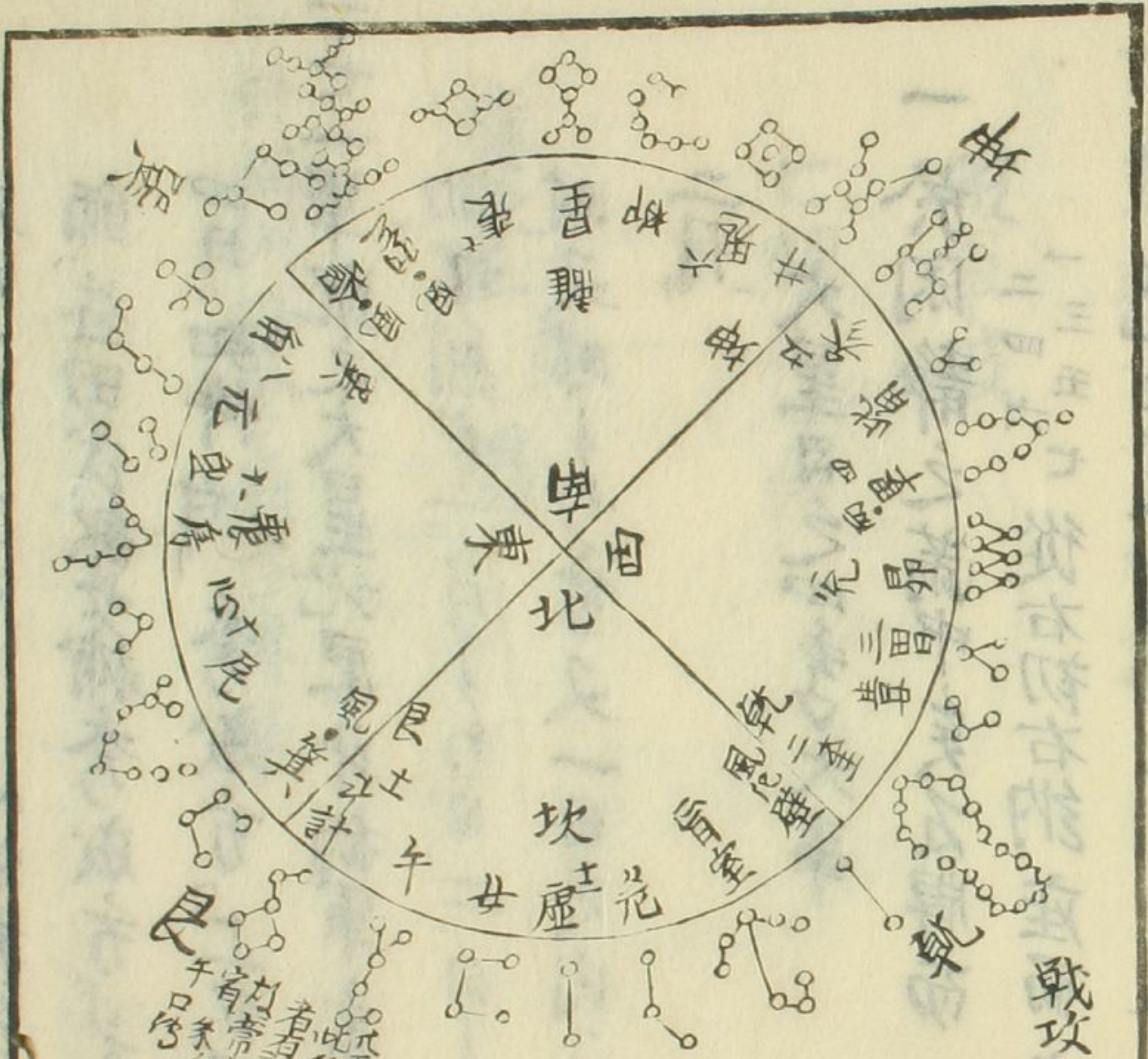
震 房 二十雲之大事、雲烟飯氣

心 二十一子ノ時、一當、一時、一取

尾 二十二、一頭、一ノ、一見、一様、一事

箕 二十三、一頭、一初、一怒、一別、一大、一將、一一、一頭、一懸、一御、一目、一様、一度、一付、一リ

懸之愷、一聲、一取、一而、一揚、一々



戰攻之高上極意五ヶ条事
 日輪 勝負口傳
 月輪 風之傳旗也
 北辰 夜分口傳
 右外旺相公節門
 付是對陣物大體
 之校也 火攻由來
 右外牛宿之時
 所謂信去流陣取
 蹴出外張ニツ就
 中五回ニツ塚其將
 大ニツ塚各

良^土沙
 坎^水虛^土女
 危

二十四内者或人ヲ殺シ不^レ親^レ保^レ之事
 二十五午是^レ此數入^レ者有^レ凶事故常者
 二十七宿覺朱丸南牛口傳有

右凡八宿之事 某小幡勤若射景憲傳受任
師益田氏部共補秀成方元和四戊午年正月九
四月如件付秀成方上依景勝之軍敗者也
三七一軍配之大星北辰斗柄軍晝夜用如此某法
助賜利也二月より日二日より方三三より
時又時より方又一日之内より四季卯の時は
二月

大星日之四季大事

一於閑靜之滿中矣反牌而

二四六

從右初右納座而去夫外誘之私而

充其本然之善 及本天同体而破之新曆也

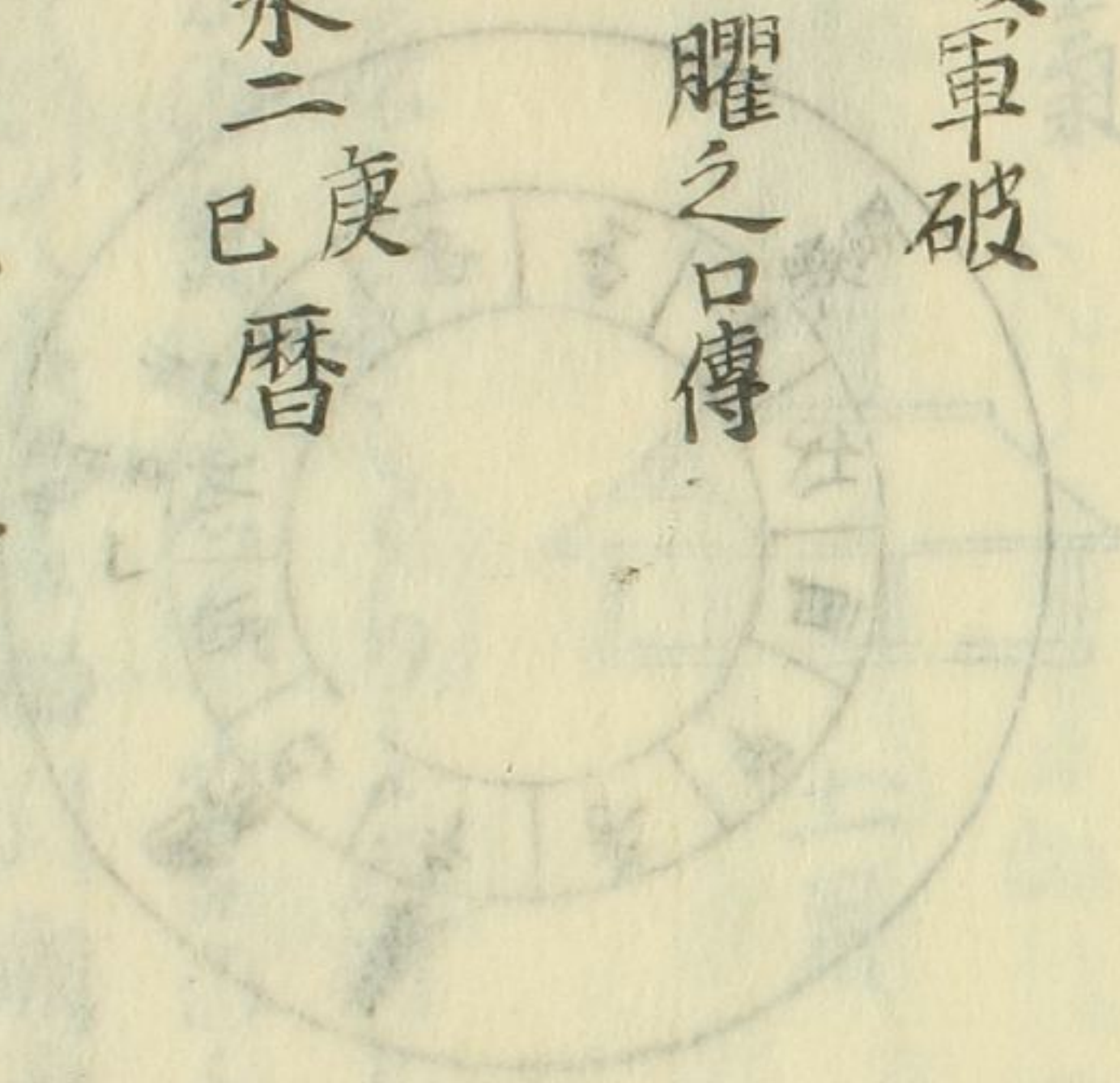
一 軍敗方角極意

破軍破

七曜之口傳

應永二庚巳曆

於相州鎌倉扇谷傳畢



前汝弥宗永

在判

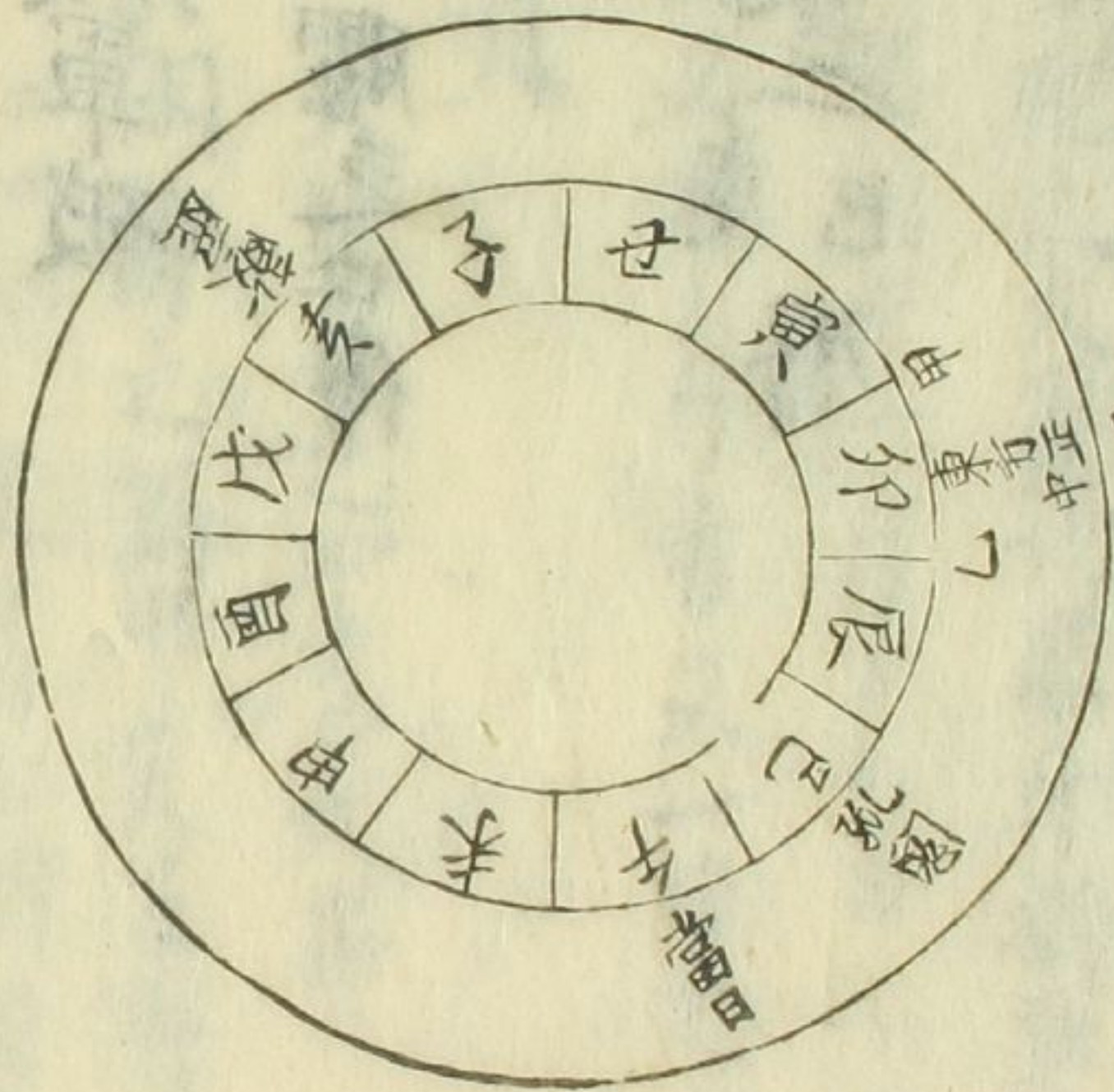
日向勘解由尉

於相州鎌倉扇谷傳畢

一 狐虚當昨日狐也向者虚也

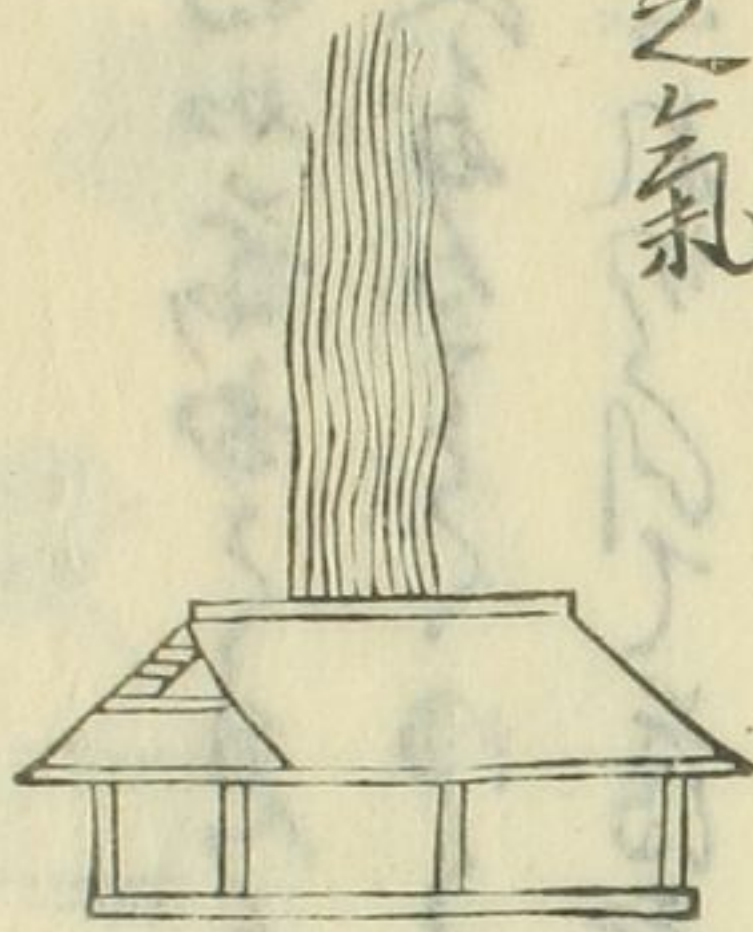
從當日六者虚

九八



二十九

宮之氣

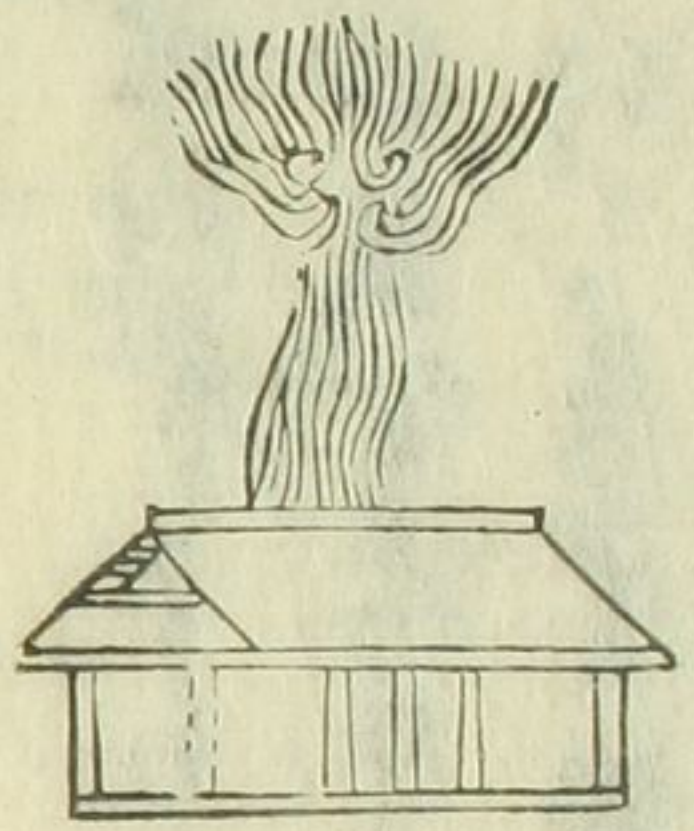


土用

大物屋の刻とらりよ又町と十所も城と隣て、敵
 味方の氣とらりよ宮の氣の城上よあるよ、
 是の所て落雲拋引朝霧深く立圍ひ如行
 程もあかしくとらり大物の氣も能定り塔
 前と心不憂長久あり城をよけ城へは先方よ
 とらりゆらりよ是は氣謀を廻し氣の勢を以て

て可軍

高之氣



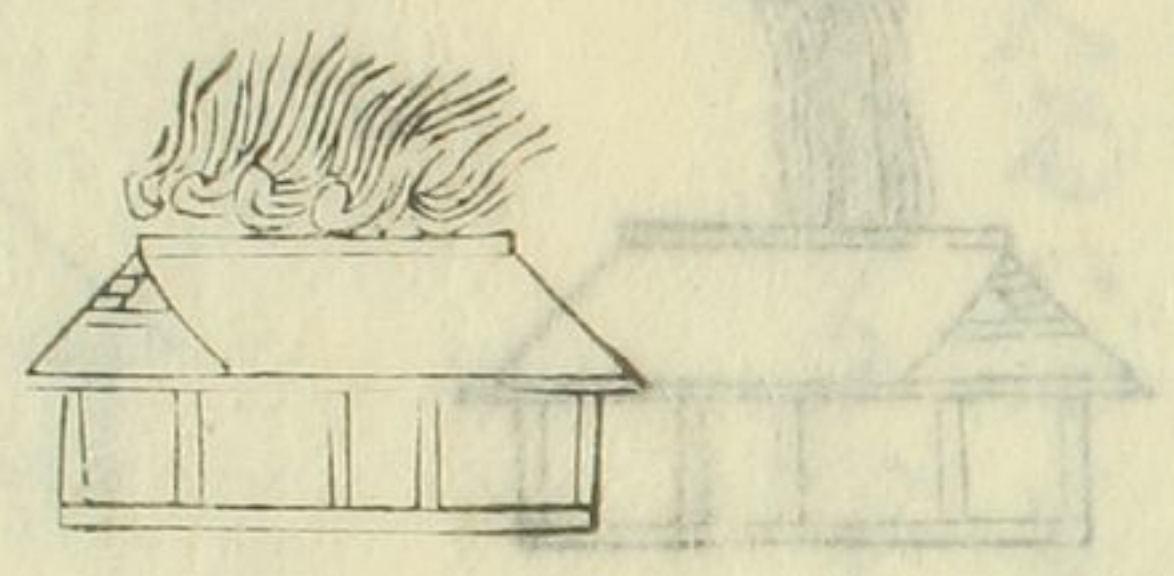
秋金

三

大物如前おく見らる高氣の大木より白布以
てふるよりとゆらくと立のやりたふ城より
とられおひて落雲船引城内と替りし大物も
摺前も心替りて来い和略の城より年月以

煙く攻とゆらとも落雲く

角之氣



春木

三

如前見く角之氣の火色ありて落雲より落る
よりて人々を毒す如煙立登るやたぐ城の四り
と押包よりよとらわらありて大物も摺前も
心不定す用心し又い大痛たやん摺前を

落くとのまとい退然也半引て米より半の
 一人よりまをたふ可むい准守能く刀を合し可
 る加場物しけい氣立の敵味方尤も軍不立
 あり

敵之氣

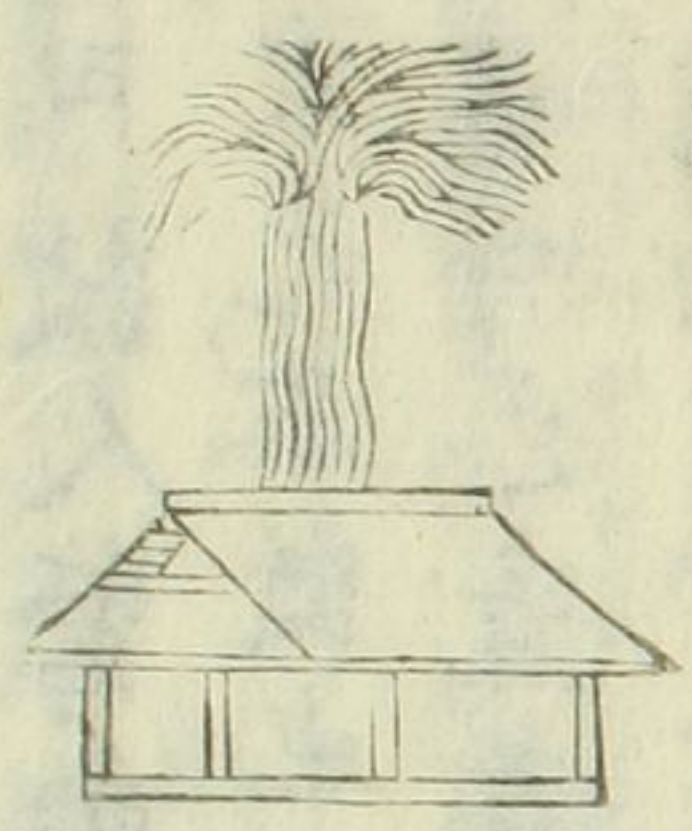


麦二火

敵のどくしけい氣と刀のよはら母一重い

くどくしけい氣のりや押包る大よととやうありと
 されど大ぬい心定てしる軍軍ととらりしも
 空ら一儀をあらへ一勢危らうとあり

明之氣



冬氷

此のどくしけい氣と刀のよはら母一重い
 葉ととらりしけい氣と刀のよはら母一重い

又よとととわらぬはひぬの大なるも新造也も
 角一敵方角尤よ大我あそく危
 兵法曰 敵人驚動則聽之聞抱鼓之音者角
 也見火光者敵也聞金鐵矛戟之音者高也
 聞人嗚呼之音者羽也寂寞無聞者宮也此
 五音者聲色之符也

○二 武田二十八代并 旗本揃目

天喜二^甲午年 龜裂下向 康平六年三月十六日討伐
 負任同重任藤原經清等摘鬲安倍致任凡斬人一万余
 人也各取其片耳納一堂建立佛舍号耳納寺迄四位下左
 馬助民部女補鎮守府將軍仔与河内仔豆甲斐相模民部野
 隆興等守兵庫凡左近將監左衛門女尉内侍殿

賴義

母修理命婦

常陸今田斐守左藤原利部兼右馬助從五位下号
 新羅三島作伴逸見小笠原等祖大治二年十月九日卒

義光

父賴義世奉於奥列討負任重任新羅依其功從 天子旗
 是於号旗之稱又賜采牌

義清

清光

板垣

信義五歳而又信先卒故十二年板垣陣代

信義

十六歳家督

信光

信政

安田

信明幼推故十年陣代

信明

時繩

信系

板垣

信武幼推故十年陣代

信武

信成

加々義

信春幼也故九年陣代

信春

信滿

板垣

信重幼推故十年陣代

信重

公方勤有及所度も陣屋之守
武田中興之武勇也采米牌賜

安田

信森幼推故十二年陣代

信森

跡部

上野介

三歳より父信森卒故昌信十五歳三才為陣代十六歳ニテ推柄
ニ時信昌十七歳甲別ニ追合ニテ信昌年十九於テ伊沢ニ跡部ニ討然
上野介之痛を蒙リテ今矣の跡ありテ信昌を痛の感力あるを蒙
テ自其痛を忘ル者討を三人撰取故より討マレシム又自一
不届しく也

信昌

信繩

信虎

晴信

信勝

父四郎勝頼

武田一家

- 一 岩田
- 二 逸見
- 三 浅利
- 四 一条
- 五 秋山
- 六 南部
- 七 下山元山の
- 八 板垣
- 九 加々美
- 十 同四郎
- 十一 勝沼
- 十二 加々美の十三 橋井
- 十四 加々美
- 十五 加々美
- 十六 加々美

右の各頼義公義光公甲列下向の終身一と一
 城つゝ海へ信昌信繩乃代すを相繼つぎしと信虎
 忠く成りてその米地と造りりて由合ハ士三十
 騎一新兵百又十或ハ又十騎一百人百騎一三百
 六十人計と云ふよしとれ合程の賜負るるれハ
 自前教多ううと云ふ人上京た上信玄の侍は

であり但右の内板垣元山計テ今相跡り

天文十二癸卯年七月信玄二十三歳定軍師之
 作法ヶ條傳受一廣願義濃守景房二辻弥兵
 衛尉盛昌三小宮山八左衛尉昌久四三科肥前入道
 政幸物語聞得就中備早定事ハ小宮山八左衛尉
 尉傳受押太鼓辻甚内盛次傳受是又慶長
 四巳癸亥年三月也

